

2017年12月1日

みずほディーラーズアイ (2017年12月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 110.00 ~ 115.50

国際為替部 為替営業第二チーム 山本 一暁

先月の為替相場

月初1日は113円台半ばでオープン。FOMCでは市場コンセンサス通り政策金利を据え置いたが、米景気認識に関する文言が上方修正されたことを受けてドル/円は114円台前半まで上昇。3日、米10月雇用統計では失業率が低下する一方、非農業部門雇用者数と平均時給は予想を下回るなどまちまちの結果となったが、米10月ISM非製造業景況指数が2005年以來の強い数字となると一時、週高値114.43円まで上昇した。週明け6日、日経平均株価上昇を横目に月高値114.73円まで上昇するも、米金利低下を受けて113円台後半まで反落。7、8日はトランプ米大統領の北朝鮮に対する牽制発言や米上院共和党が法人減税先送りを検討とのヘッドラインを受け上値重く推移。9日、日経平均株価がバブル崩壊後の最高値圏から急落すると売りが強まり週安値113.09円まで下落。週末10日、日経平均株価に押し目買いが入ると113円台半ばまで値を戻した。13日週前半は目立った取引材料がない中、113円台半ばで揉み合い推移。15日、日経平均株価の軟調推移を受けてドル/円は売り優勢の展開。米11月NY連銀製造業景況指数が市場予想を下回ると一時、112円台半ばまで下落した。16日、日経平均株価の反発にドル/円も下げ止まるも、17日、米大統領選へのロシア介入疑惑に関する報道が伝わると米金利低下に合わせて一時111.95円まで下落した。週明け20日は押し目買いが先行。米金利上昇や良好な10月景気先行指数を受けて週高値112.71円まで反発。一段の買い材料がない中、21日は揉み合い推移。22日、イエレンFRB議長の講演内容がハト派的に捉えられ、ドル/円は下落。弱い米10月耐久財受注も相俟って、111円台前半まで下落幅を拡大した。日米祝日の23日に週安値111.07円をつける場面もあったが、市場参加者が限られる中で方向感はず、週末24日は本邦輸入勢の買いにサポートされ111円台半ばを回復した。週明け27日、対ユーロでドルが弱含む中、北朝鮮によるミサイル発射観測もあってドル/円は111円を下抜け、月安値110.85円まで一時下落。しかし、同水準では押し目買い意欲強く、28日には債券/円の上昇や米上院予算委員会で税制改革法案が可決されたことを受けて111円台前半まで反発した。29日は北朝鮮によるミサイル発射があったものの、FRBイエレン議長のタカ派な議会証言や良好な米7~9月期GDP(2次速報)の結果を受けてドル/円は上昇し112円台を回復、同水準で越月した。

今月の見通し

今月のドル/円相場は、「下値リスクをはらむも底堅い推移」を予想する。市場参加者の関心は「米税制改革法案」と「米金融政策」に絞られている。「米税制改革法案」については、先月16日に米下院で可決されており、同月30日には米上院での採決が予定されている。法人減税の実施時期をはじめとして、両院の税制改革法案には大きな隔たりがあり、上院で可決後は摺り合わせが必要不可欠である。しかし、トランプ大統領の目指す年内成立に向けて近づいたことは市場でも評価されるだろう。仮に上院で否決や採決延長となったとしても、法案内容の微調整を行い再度決議に諮られることが想定されることから、ドル/円相場への下押し圧力は短期的と見込まれ、むしろ改革への期待感がドル/円の下支えとなると考える。「米金融政策」については、FOMCが今月12~13日に開催される。今月末時点において、FFレート先物から予想される利上げ確率は既に95%超に達しており、米政策金利が25bp引き上げられること自体の為替相場への影響は限られそう。より重要視されるのは、同時に発表される経済見通しとドットチャートであろう。11月FOMC議事要旨では、FRBメンバーの数人が9月会合時と比較してインフレの先行きについてやや懸念する内容が示されていた。しかしながら、最高値更新を続ける米株や、足許総じて良好な米経済指標を勘案すれば、正常化の歩みを緩めるには至らないだろう。実際、先月29日の議会証言においてイエレンFRB議長は「米経済は一段と強さを増した」とコメントした。現在のドットチャートは2018年、2019年ともに3回の利上げを示しており、それが維持されるようであれば、来年の利上げに対する市場の織込み度合いは未だ低いことから、市場は米金利上昇、ドル買いで反応すると予想する。また、歴史的に見て高水準にある円ショートポジションは先月にやや調整が入っており、「米税制改革法案」成立とハト化しない「米金融政策」を背景に投機筋が再びドルで円ショートポジション構築に動くことも想定される。したがって、メインシナリオとしてはドル/円の堅調推移を予想する。ドル/円相場の下値リスクシナリオとしては、今月8日に期限を迎える米債務上限問題を巡り与野党協議が紛糾すること、FOMCがハト派姿勢に傾くこと、市場期待を下回る内容のまま米税制改革法案が成立すること、北朝鮮周辺地政学リスクが上昇すること等が挙げられる。

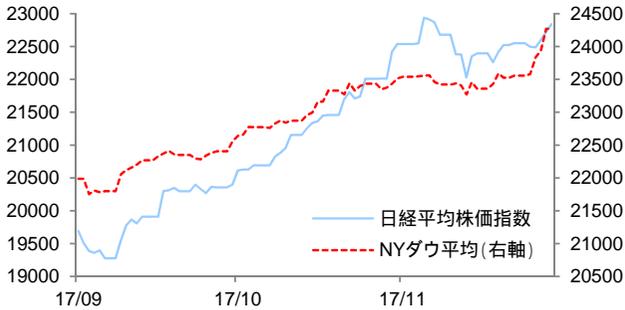
為替の動き

(資料)ブルームバーグ



株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	米ISM製造業景況指数	10月	59.5	58.7	60.8
11/2	米FOMC(政策金利)	11月	1.00-1.25%	1.00-1.25%	1.00-1.25%
11/3	米非農業部門雇用者数変化	10月	313K	261K	-33K
11/3	米ISM非製造業景況指数	10月	58.5	60.1	59.8
11/15	CPI(前年比)	10月	2.0%	2.0%	2.2%
11/15	CPIコア(前年比)	10月	1.7%	1.8%	1.7%
11/15	NY連銀製造業景況指数	11月	25.1	19.4	30.2
11/22	耐久財受注(前月比)	10月	0.3%	-1.2%	2.0%
11/29	コアPCE(前期比)	3Q	1.3%	1.4%	1.3%
11/29	GDP二次速報(前期比)	3Q	3.2%	3.3%	3.0%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

ドル・ブル (5名、110.00~116.00、中心110.00~116.00)

加藤	111.00 ~ 115.00	ゴールドロック相場継続。株価が想定以上に大きく調整されない限り北朝鮮問題を理由にしたリスクオフという名目の円買いには限界があり、実需の外貨買いの影響がボディーブローのように効いてくると予想する。
高田	110.00 ~ 116.00	FRBの金融引締めに向けた着実な取組姿勢に変化はなく、堅調な米経済指標や要人発言を背景にドルがサポートされる展開を予想する。低インフレ率が意識される局面では上値が押さえられようが、利上げ確度が高まるにつれてドルは底堅く推移すると思う。
佐藤	110.00 ~ 116.00	市場はインフレ率が近い将来に上昇せず、米金融正常化路線は早晚頓挫すると決め込んでいる節がある。インフレ率の上昇やFOMCで利上げ継続路線が確認されればドル/円は戻り、高値を試す展開を予想する。
藤巻	110.00 ~ 116.00	FRBは更なる利上げに向かっていく。インフレがポイントとなるが、税制改革や堅調な原油市況はインフレ期待を押し上げる可能性もある。よってドル/円は堅調な推移を想定する。但し、高値圏で推移するリスク資産の調整には常に警戒したい。
西谷	111.00 ~ 115.00	FRB内で基調的な低インフレを懸念する声が増えている模様だが、足許の米経済の状況を踏まえれば、今月FOMCで利上げペースを大きく下方修正するとは考えづらい。また、株式市場が堅調に推移していることから底堅い推移を予想する。但し、米税制法案の行方には注意が必要。

ドル・ベア (7名、106.00~114.00、中心108.00~114.00)

田内	109.00 ~ 114.00	米税制改革協議における上下院両院協議会での法案調整は依然として難航する可能性が残っており、ロシアゲート疑惑や地政学リスクを要因とするドルの重石に加え、投資家の年末決算対策等のポジション調整の動きも想定され、ドルの戻り売り圧力は根強く上値は限定的と見る。
山下	106.00 ~ 112.00	米利上げは本線であり、FOMCまでは底堅く推移すると考えられるが、低インフレ懸念が払拭されたわけではなく、FOMCのステートメントでは次回以降の追加利上げに対して消極的な内容となる可能性も。月末に向けて、下値を試す展開を予想する。
矢野	108.00 ~ 114.00	FOMCでの利上げ期待、米税制改革案に関しては既に織込み済みで特段の材料とは想定せず。寧ろ、これまで上昇してきた株式相場の調整や北朝鮮問題などリスクオフに伴う下落リスクに注意。
岡本	108.00 ~ 114.00	8日の債務上限期限、15日の議会閉会までに米税制改革法案をまとめられるか不透明。仮に法案が成立したとしても、その他新規のドル買い材料は少なく、ドル買いの流れは長続きしないと予想。法案成立後は徐々にドル売り優勢の展開となろう。
森谷	108.00 ~ 114.00	来年以降の米国利上げペースや税制改革法案の行方について不透明感が高い状況が続いている中、ドルを積極的に買う動きは控えられやすいだろう。今年に入り堅調推移を続けてきた株価に調整が入る可能性も捨てきれず、リスク回避の円買いが想定外に強まる可能性にも警戒しておきたい。
鶴田	108.50 ~ 113.50	注目は米税制改革法案の行方。トランプ氏の想定通りクリスマスまでの法案成立となれば、ドル買い材料となり得そうだが、上下両院案にて差異が生じている状況下、スムーズな法案成立は難しいものと考え。年末特有のポジション調整の動きも予想される中、ドル円は上値の重い展開を基本線とした。
大熊	109.00 ~ 114.00	足許の米経済指標は堅調で米株も好調にもかかわらず、ドルの上昇圧力が弱まっている。12月の利上げは規定路線の為、FOMCまでは底堅いと思われるが、市場が来年の利上げに確信を持ち、長期金利の上昇トレンドが明確とならない限りは徐々に下値を切り下げる展開を予想する。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.1500 ~ 1.2200
EUR/JPY 130.00 ~ 135.00

国際為替部 為替営業第二チーム 岡本 明生

先月の為替相場

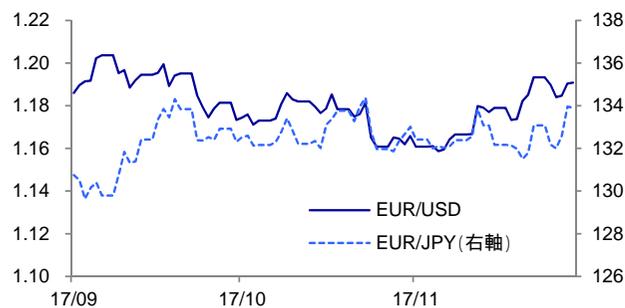
週初11月1日は米FOMCで発表された米経済情勢の認識が上方修正されたことからユーロドルは1.16台前半まで下落。しかし、翌2日米下院が発表した税制改革案にて住宅ローンの税控除縮減が盛り込まれたことが嫌気され1.1687まで上昇。3日発表の米10月雇用統計が予想を下回ると、週高値1.1691まで一段と上昇。しかし、米12月利上げを妨げるほどのものではないとの見方が強まり、1.16ちょうど近辺まで下落して越週した。週初6日はユーロ売りの流れが継続する中、1.15台後半まで値を下げたが、米金利が低下すると1.16台前半を回復。7日には節目である1.1600を明確に下回るとストップを巻き込みながら1.1553まで値を下げたが、その後は1.16台手前まで買い戻された。8日は米上院共和党が法人減税先送りを検討との報道を背景に1.16台前半まで上昇。しかし上値を追い動きは限られ、1.15台後半までじり安の展開となった。9日は米税制改革に対する不透明感から一時1.1655まで上伸。10日はECB理事会メンバーのノボトニー氏の発言を受けて出口観測が浮上。また、米法人税減税が2019年に遅れる可能性も意識され、1.16台後半まで上昇して越週した。週初13日は週安値1.1639まで下落する場面もあるも、翌日にECB主催のシンポジウムを控えて小動きの展開。14日は独3QのGDP(速報値)が予想を上回ったことが好感され、1.1805まで上昇した。15日は約1か月ぶりの高値1.1862まで続伸したが、その後は米金利が下げ渋ったため、1.17台後半まで反落。16日は特段材料なく同水準で小動き。17日は良好な米経済指標あるも1.17台後半では底堅い展開となり越週。週初20日は、メルケル独首相による連立協議が決裂したことを受け1.17台前半まで急落。その後メルケル首相が「再選挙の方が望ましい」と発言したことも悪材料。21日は量的緩和の終了に関するECB関係者談を受けて1.1713まで下落、その後も上値重く推移。22日は冴えない米10月耐久財受注を受けて1.18手前まで上昇。さらにFOMC議事要旨のハト派な内容から1.18台前半まで上値を伸ばした。23日は独政権の大連立を探る動きが伝わり1.18台半ばまで上昇。24日は独連立協議への期待感に加え強い独経済指標もあり1.19台前半まで上昇し越週した。週初27日は、ユーロ買いの流れが継続し2か月ぶりの高値1.19610まで上昇するも、その後は売りに押される展開。28日は米税制改革法案が上院予算委員会で承認されたため、全般的にドルが買い戻され1.18台前半まで下落。29日は1.18台後半まで戻すも、イエレンFRB議長が足元の経済環境に強気な認識を示したため1.18台前半まで再び下落。30日のアジア時間は1.18台半ばでのレンジ推移となった。

今月の見通し

ユーロは1.20台で上値の重い展開を予想する。スペイン・カタルーニャ自治州の独立問題は落ち着きを取り戻したものの、EUの盟主ドイツではメルケル首相率いる与党キリスト教民主・社会同盟(CDU/CSU)が自由民主党(FDP)、緑の党との連立政権樹立に失敗し、元連立パートナーの社会民主党(SPD)と再度連立協議を開始したが、一筋縄ではいかない様相を呈しており、欧州の政治リスクが再び意識されやすい環境。シュタインマイヤー独大統領は元SPD党首であり、シュルツ現SPD党首に協議再開の圧力をかけているとみられるが、SPD党内でもメルケル首相との協議を求める声がある。再選挙との選択肢もありうるが、最新の世論調査では投票意向は選挙前後で変化しておらず、仮に実施されたとしても獲得議席数に大きな変化は望めない。この場合、シュルツ氏からメルケル氏率いるCDU/CSUとの協議に前向きな党首に交代する可能性も残されていることを踏まえると、想定しうる選択肢の中で可能性が高いのはCDU/CSUとSPDの大連立か。政局不安が払拭され、ユーロ買いに繋がるだろう。交渉スケジュール以外では、7日(木)にSPD党大会があり、シュルツ氏が党首に再び指名されるかもケアしておきたい。また、21日(火)にカタルーニャ州議会選挙も予定されている。直近の地元紙の世論調査では独立を望むとの回答は24%に留まっており、また同国憲法第155条を適用し強制的に州議会を解散した措置については与党内からも反論が出ていたことも勘案すると、独立の気運が必ずしも盛り上がっている訳ではない。ここでスペイン残留となれば一段とユーロ買いの材料となる可能性はあるも、市場はある程度このテーマを消化している思われ、上値は限定的だろう。一方で、足元のユーロ上昇はドル下落が主導している面があり、米税制改革法案以外に積極的にドルを買う材料に乏しく、今後もドル売りの流れからユーロが上昇しやすい展開も想定される。しかし、9月のECB理事会にてユーロ高率制が出たときの水準が1.20近辺であったことを踏まえると、1.20台ではECB高官からユーロ高を牽制する声が再び出てくる可能性もある。また、上述した欧州政治リスクは残存しており、ECB理事会でテーパリングを決定したにもかかわらず上昇しない欧州金利なども踏まえると、ユーロを一段と買い進む材料も弱さが残る。今年8~9月にも一時1.20台まで上昇したが滞空時間は短かったように、1.20台では上値が重くなるだろう。

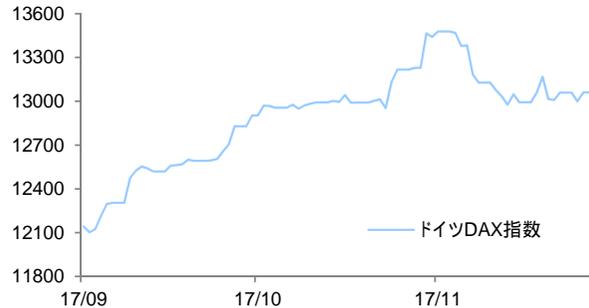
為替の動き

(資料) ブルームバーク



株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/7	ユーロ圏小売売上高(前月比)	9月	0.6%	0.7%	-0.5%
11/14	独ZEW景況感	11月	88	89	87
11/14	独GDP(前年比)	3Q	2.3%	2.8%	2.1%
11/16	ユーロ圏CPI(前月比)	10月	0.1%	0.1%	0.4%
11/22	ユーロ圏消費者信頼感	11月	-0.8	0.1	-1.0
11/24	独IFO景況感	11月	116.7	117.5	116.8
11/29	独CPI(前月比)	11月	0.3%	0.3%	0.3%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

ユーロ・ブル (7名、1.1550~1.2150、中心1.1600~1.2100)

山下	1.1700 ~ 1.2000	ECBメンバーによるユーロ高牽制やユーロ圏政治不安等、ユーロを積極的に買って行く材料には乏しい。しかし、ドル軟調地合いが予想される中、ユーロはニュートラルないしは、どちらかと言えばブル目線を維持したい。
高田	1.1600 ~ 1.2100	底堅い展開を予想する。カタルーニャ情勢を巡る市場の混乱は一服しており、良好な経済指標が確認されれば素直にユーロは買われるのではないかと。ただしECBが示したフォワードガイダンスには緩和バイアスも残っており上値は限定的であろう。
藤巻	1.1550 ~ 1.2150	堅調推移を予想。欧州域内で経済指標の良好な結果が散見される中、ECBは引き締め方向に向かっている。政治リスクも後退しつつあるため、ユーロは上昇を想定。
西谷	1.1700 ~ 1.2100	来年1月以降、ECBが金融政策の正常化を進める過程でユーロ高方向が基本線。依然としてスペインやドイツの政治リスクは燻るものの、足許ではやや悲観的なムードは和らいでいる印象であり、問題が収束に向かえば上昇基調に戻るものと考えている。
森谷	1.1600 ~ 1.2100	独連立協議を巡る不透明感に残るものの、懸念された再選挙には至らない可能性が高い。堅調な経済指標やECBの金融政策に対する期待感を背景にユーロ相場は底堅い推移を予想する。弱いドル相場もユーロ相場の支えとなるだろう。
鶴田	1.1600 ~ 1.2100	欧州政治不安を受け上値の重い展開も見られたが、ドイツで懸念された連立協議決裂問題も再び社会民主党との大連立の可能性が浮上。カタルーニャ州独立問題も解決の糸口が見えない状況ではあるも大幅に悪化する展開も考え辛い。政治懸念が徐々に後退しユーロ相場は堅調推移を予想する。
大熊	1.1600 ~ 1.2100	不安視されている独連立政権の本格的な協議は年明けとされており、政治リスクは一旦後退している。欧州経済は堅調である一方で米税制改革実現の不透明感も払拭されていない中、ユーロは底堅く推移すると思われる。

ユーロ・ベア (5名、1.1500~1.2000、中心1.1500~1.2000)

田内	1.1600 ~ 1.2000	メルケル独首相による連立協議決裂を受け、ドイツ国内だけでなく欧州全体での政局混迷が懸念されている。カタルーニャ州議会選挙を控えたスペイン情勢への警戒感も相俟って、ユーロは伸び悩む展開を予想する。
加藤	1.1500 ~ 1.2000	ゴールドロック相場継続でレンジ内での推移を予想。出口戦略の議論はゆっくりと進むと思われるが、マイナス金利がある以上、域内資産よりも域外資産の魅力は衰えないことも影響か。
矢野	1.1500 ~ 1.2000	ドイツの政治不安やECBメンバーのハト派姿勢等、どちらかと言えば売り要因が多く見受けられる。また積みあがったユーロ・ロングポジションのアンワインドが巻き込まれれば、一段安となる可能性も。
佐藤	1.1500 ~ 1.2000	最近のECB高官のコメントを見ると、ECBの金融正常化路線は市場が期待していたよりも漸進的に進む可能性が出てきている。市場で醸成されてきた期待値の修正がユーロの上値を抑制しそうだ。
岡本	1.1600 ~ 1.2000	今月はスペイン・カタルーニャ州議会選挙が予定。独連立政権樹立にも暗雲垂れ込める中、積極的にユーロを買う材料に乏しい。米税制改革法案への期待感の後退からユーロが上昇する場面があったとしても、1.20近辺では上値が重くなるだろう。

英ポンド相場

予想レンジ: **GBP/USD 1.3050 ~ 1.3650**
GBP/JPY 146.00 ~ 151.00

欧州資金部 山本 泰平

先月の為替相場

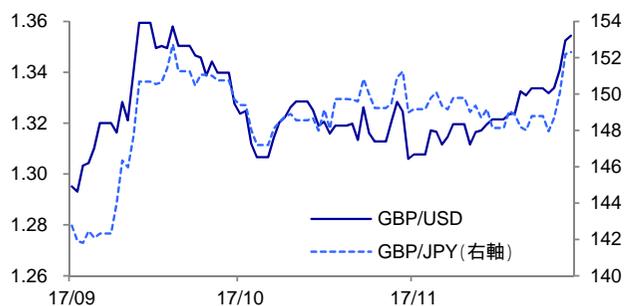
11月のポンドドルは1.3284でオープン。注目された2日の英中銀金融政策委員会では、9名の理事のうち、総裁を含む7名が賛成し、10年ぶりに政策金利の引き上げ(0.25%→0.50%)を決定。しかし、市場は利益確定のポンド売りで反応。翌日、ブロードベント副総裁が「今回の利上げは、将来の利上げを約束するものではない。」と慎重な姿勢を強調したことも相俟って、1.3040まで下落。一服後は、英EU離脱交渉の進展を期待し反転。年内に大きな進展はないとの見方が強まる中、デービスEU離脱担当相が「離脱による支払額は恐らく英国よりもEU27カ国にとって有利な条件になるだろう」、EU側交渉責任者バルニエ氏が「交渉を加速する用意がある」とコメント。さらに日曜紙(5日)が、「メイ首相は手切れ金を600億ユーロ以上支払う準備がある。(関係者)」と具体額を伝えたことで、ようやく通商協議へ進めるとの期待感が浮上し、1.3229まで買い戻された。一方、メイ政権に対する退陣圧力が強まる中、閣内では、セクハラ問題でファロン国防相が引責辞任し、パテル英国国際開発相も政府に無断でイスラエル首相と会談したことが批判され、辞任。さらに、イラン系英国人巡る批判で、ジョンソン外相への退陣要求も高まり、メイ政権の弱体化に拍車がかかる中、英保守党議員40人(首相退陣は8人足りないが、解散総選挙には十分な数)がメイ首相に対する不信任を表明。10月の党大会前は35人だった賛成議員数がわずか1か月で5人増加したことが嫌気され、ポンドドルは1.3063まで低下した。14、16、17日はEU加盟国外交官らが会合を開き、EU内の意見集約等を進展させると見られたが、具体的な成果は、確認されなかった。越週後は、ハモンド財務相の予算案発表を前に、期待感から1.3279まで上昇。22日、注目された予算演説では、英成長率見通しがいずれの年も2%を下回る水準まで下方修正され、国債発行額の増額が示されたため、直後、市場は売りで反応。しかし、30万ポンドを上限に住宅購入時の印紙税を撤廃することを発表すると、不動産市場下支え期待から反転し、1.33台後半まで上昇した。

今月の見通し

今月のポンドドルは、方向感乏しくかつ小動きを予想。先月は、英利上げが決定されたが、金融政策委員会(MPC)内で見解が分かれていることや継続性が乏しいことから、ポンド相場に与える影響は限定的だろう。むしろ、12月13日のFOMCで決定される米利上げの行方に市場の注目は移っている。想定通り利上げが決定されれば、2017年中に3回の利上げを実行したこととなり、米正常化の進捗が際立ち、ドル買いに繋がるだろうか。英EU離脱交渉を巡っては、12月14、15日のEU首脳会議で通商交渉へ進むゴーサインが示されるかが注目される。EU大統領が12月4日までに英首相から提案を行うよう要請したため、それまでに詳細が示される見込み。懸案事項であった離脱清算金問題は、英主要閣僚が増額の方針を固めたことで、合意への機運が浮上しているが、アイルランド国境問題は解決の糸口は全く見いだせていない。EU側からはEUルールを適用することを提案されたが、保守党政権に閣外協力する北アイルランドの民主統一党(DUP)が強く反対したことから、英政府が歩み寄ることは難儀だ。また、相手方のアイルランドでは、閣外協力する第2党の共和党が、不信任案を提出する構えを示したことから、国内で少数与党政権崩壊の危機に瀕しており、対外強硬路線に傾きやすい。同国首相は、国境問題で解決策が出なければ通商交渉に移行することは認めず、「拒否権」を行使すると明言。同国外相は、EU首脳会議で支持する用意はないと述べた。もし、12月中の進展が叶わなければ、次の首脳会議は半年先となり、英国が「合意なし」でEUを離脱する懸念が広がるだろう。経済指標では、12月12日に発表される11月の英CPIが注目される。英中銀インフレ報告で、物価上昇が10月にピークを迎えが低下すると示唆されていたため、10月の上昇率3.0%を下回れば、利上げペースは極めて緩慢で良いとする英中銀の想定通りの展開となることから、ポンドは売られる可能性がある。

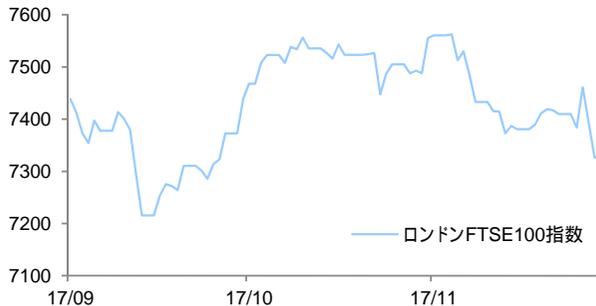
為替の動き

(資料)ブルームバーグ



株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	製造業PMI	10月	55.9	56.3	56.0
11/2	建設業PMI	10月	48.5	50.8	48.1
11/3	サービス業PMI	10月	55.3	55.6	53.6
11/10	鉱工業生産(前年比)	9月	1.9%	2.5%	1.8%
11/10	製造業生産(前年比)	9月	2.4%	2.7%	2.8%
11/14	消費者物価指数(前年比)	10月	3.1%	3.0%	3.0%
11/15	ILO失業率	7-9月	4.3%	4.3%	4.3%
11/16	小売売上高(含自動車/前年比)	10月	-0.5%	-0.3%	1.3%

豪ドル相場

予想レンジ: **AUD/USD 0.7400 ~ 0.7750**
AUD/JPY 84.00 ~ 87.00

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 山口 美紀

先月の為替相場

11月の豪ドルは5か月ぶり安値0.7532を付けた。

1日、豪ドルは0.76半ばでスタート。世界的に堅調な株価を背景に、リスク通貨の豪ドルは0.76後半に上昇。翌日早朝、FOMCにおいて米景気認識に関する文言が上方修正されるも、ドル買いの動きは限定的となり、豪ドルも0.76後半で横ばい。その後、良好な豪9月建設許可件数を受けて、豪ドルは0.77台に上伸。一時、11月高値0.7730を付けた。しかし、3日、豪9月小売売上高が前月から横ばいと、市場予想0.4%を大きく下回り、豪ドルは0.76台に反落。7日、豪州準備銀行(RBA)理事会では予想通り政策金利が史上最低の1.5%で据え置かれた。豪ドルはしばらく0.76台での揉み合い推移が続いた。

10日、RBA四半期金融政策報告書にてGDPとインフレ見通しが小幅に下方修正され、豪ドルは0.76半ばで上値重く推移。13日、トランプ米政権が目指すクリスマスまでの米税制改革法成立に懐疑的な見方が広がり、リスクオフの動きが強まる中、リスク通貨の豪ドルは0.76前半にじりじりと下落。更に、15日、豪7~9月期賃金価格指数は前年同期比2%上昇、前期比0.5%上昇となった。市場予想の前年同期比2.2%上昇、前期比0.7%上昇を下回る結果となり、豪ドルは0.75後半に急落した。翌日の豪10月雇用統計はほぼ予想通りの結果となり、豪ドルは横ばい。17日、再び、米税制改革法成立に対する不安が高まり、リスクオフの流れから、豪ドルは一時0.75前半に下落。

21日、RBA議事録は新規材料を欠くものとなるも、豪ドルは5か月ぶり安値0.7532まで一時下落。その後、ロウRBA総裁が講演にて「経済が予想通りに改善し続ければ、政策金利に関する次の手は引き上げになるだろう」と述べた。このコメントが好感され、豪ドルは0.75後半に反発。22日~30日、目立ったニュースに欠け、豪ドルは0.75後半を中心にもみ合い推移した。

今月の見通し

今月の豪ドルは上値の重い展開を予想する。12月12~13日FOMCにて発表されるFOMCメンバー経済・政策金利見通しの変化有無に注目。

先月発表されたRBA声明文、RBA議事録では先々月同様、豪経済には慎重ながらも楽観的な見方が示され、2018~19年にかけて3%を超える勢いで加速すると述べられた。一方、RBAは引き続き低い賃金上昇率、高水準の住宅債務には懸念を示している。RBAは低水準の金利は豪経済を支援すると考えており、政策金利はしばらく据え置かれるだろう。

次に、米国の金融政策において、12月FOMCにて0.25%の利上げが行われることは確実視されており、利上げが為替相場に与える影響は軽微と考える。一方、先月公表されたFOMC議事要旨(10月31日~11月1日開催分)において、物価の低迷が中期的に継続するリスクを指摘した参加者が少なくなかったことが明らかになった。これを受けて、米債利回りは低下している。かかる中、12月FOMCで発表予定のFOMCメンバーによる経済・政策金利見通しに注目が集まる。前回9月発表時は2018年3回、2019年2.25回となっている。しかし、米短期金利先物市場では2018年1.5回、2019年0.25回と、利上げ織り込みは全く進んでいない。

以上を踏まえると、豪州と米国の金融政策の方向性の違いから、豪ドルは軟調な展開を予想する。しかし、米国も今後の利上げペース鈍化の可能性高く、大幅な米ドル高(豪ドル安)は進みにくいと考える。

12月重要イベントは以下を考えている。5日豪10月小売売上高、RBA理事会、6日豪7~9月期GDP、7日豪10月貿易収支、8日豪10月住宅ローン申請件数、14日豪11月雇用統計、19日RBA議事録。

今月のつばやき(現地からの声)

『当地のここが好き!』

オーストラリアの好きなところは、フレンドリーなオーストラリア人、綺麗なビーチ、ブルースカイ、安くて美味しいオーギービーフ・ラム、新鮮なシーフード、数多くの新世界ワイン、多くのクラフトビール、オーガニック商品の充実、壮大な自然、安全、公用語英語、多民族・多文化国家、数多くの希少動物、マリンスポーツ・ゴルフ・乗馬等豊富なアクティビティ、世界で最も住みやすい都市にランクイン(特にメルボルンは7年連続トップ)、自主性を育む教育、等と切りが無いので、今回は独断で選ぶオーストラリアの好きなところベスト3を紹介します。

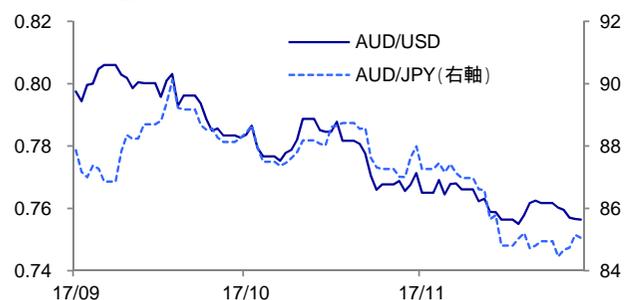
①フレンドリーで明るいオーストラリア人: ディーリングルームのオーストラリア人同僚達はお話大好き、常に会話、笑顔が絶えないです。一日の半日会社にいることを考えると、素晴らしい仲間達と一緒に働け、非常に幸せを感じています。私も何となく明るくなったような気がします。

②綺麗なビーチ: Cityから車で10分で綺麗なビーチに行くことができます。水泳、サーフィン、浜辺でリラックス、ビーチで何でもできます。もちろんオーストラリアンBBQも。私は海水浴よりも、ビーチで読書がお気に入り(読書からのお昼寝は至福の時間)。また、先日FlightNetwork社が世界のベストビーチ50を発表。2位にWhiteHeavenBeach(QLD)がランクイン。コバルトブルーの海、白い砂浜で最高に綺麗でした。他にも8位HyamsBeach(NSW)、18位LuckyBay(WA)、29位TurquoiseBay(WA)もランクインしました。

③ブルースカイ: 和食がユネスコ無形文化遺産に登録されたように、オーストラリアのブルースカイも無形文化遺産に登録されたいと願う程の綺麗さです。この綺麗な空は見ているだけで飽きません。綺麗な空を見て、私の心も綺麗になった気がします。いや、昔からかな!(笑)

為替の動き

(資料) ブルームバーク



株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/2	貿易収支	9月	A\$1200MA	\$1745MA	\$873M
11/2	建設許可件数(前月比)	9月	-1.0%	1.5%	0.1%
11/3	小売売上高	9月	0.4%	0.0%	-0.5%
11/7	RBA政策金利		1.5%	1.5%	1.5%
11/9	住宅ローン(前月比)	9月	2.0%	-2.3%	1.5%
11/16	雇用者数	10月	18.8千人	3.7千人	26.6千人
11/16	失業率	10月	5.5%	5.4%	5.5%
11/21	RBA議事録				
11/30	建設許可件数(前月比)	10月	-1.0%	0.9%	0.6%
11/30	民間建設許可件数	7-9月	1.0%	1.0%	1.1%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2700 ~ 1.3100
CAD/JPY 86.00 ~ 90.00

グローバルマーケット業務部 カナダ室 那須 紘子

先月の為替相場

USDCADは1.2874でオープン、11月は概ね1.27~1.29でのレンジ推移。

3日発表の10月カナダ雇用統計は予想の前月比+1.5万人を大きく上回る同+3.53万人増となった。今回の増加は全てフルタイム雇用の増加によるもので、10月は平均賃金も前年比2.4%上昇。ハリケーンの影響で雇用が予想以上に激減し、賃金の伸び率も横ばいとなった米国とは対照的に非常に好調な結果となった。発表後はカナダドル買いが加速、USD/CADは1.2825から1.2712へと下落し10月25日以来の安値を記録した。

7日、米9月消費者信用残高が2016年11月以来最大の伸びを記録、USD/CADは一時1.2800を上抜けするが維持出来ずに再び下落。その後1バレル57ドル台まで上昇した原油価格(WTI)を材料にカナダドル買いが優勢となり10日、USD/CADは1.2666までカナダドル高が進んだ。

14日、国際エネルギー機関(IEA)が最近の価格上昇と暖冬が世界の原油需要を低下させるだろうとして2018年の石油需要見通しを引き下げたために原油(WTI)は売りが進み、1バレル56ドルを割り込む大幅安となった。また翌日、米エネルギー情報局(EIA)の週間在庫統計で原油在庫が予想に反し前週比+190万バレルの増加を発表、米国内の供給過剰に対し警戒心が更に広がり1バレル55.33ドルまで下落。これを受け、15、16日はカナダドル安が優勢となりUSD/CADは1.27台後半まで上昇した。

更に17日に発表された加10月消費者物価指数(CPI)は前年比+1.4%で市場予想と一致するも先月(同+1.6%)から減速したためにカナダドルは更に下落、USD/CADは一時1.2815までつけた。

しかし22日、FOMC議事要旨にて米連邦公開市場委員会(FOMC)メンバーがインフレの低迷が長期化していることに対して懸念を抱いているとの見方が広がり、米長期金利が低下、主要通貨に対しUSDドルは売られUSD/CADは再び1.280台以下へと下落した。その後再び原油が1バレル58ドルを越える高値圏で取引される展開となりUSDCADは1.26台へ。

28日、上院財政委員会に続き米上院の予算委員会は法人税を2019年から現行の35%から20%に引き下げる税制改革法案を賛成12、反対11で可決、30日は共和党のマケイン上院議員が法案を支持する意向を示すなど年内の改革実現により弾みがつく形となった。これを受けてUSDドル買いが優勢となりUSDCADは一時1.2909を記録、30日終盤は1.290台前後で推移している。

今月の見通し

11月末現在、12月6日のカナダ中銀会合における利上げの可能性は13.6%と市場では「利上げ無し」との見方でほぼ決定している。むしろ最近の弱いカナダ経済データ、減速感の強まるインフレ数値から2018年度の利上げ予想は3月から5月辺りへと後退。現在、2年ぶりの高値圏である1バレル58ドル台で推移している原油価格(WTI)が辛くもカナダドルを下支えしている形となっている。1日発表の7~9月期GDPでも今回は伸び率が前年比+2%を割り同+1.6%となると予想されている。北米自由貿易協定(NAFTA)再交渉が続くなか、もしも交渉が決裂となった場合、カナダ経済に及ぼす直接的な影響は1%未満であるとBank of Montrealエコノミストのレポートが発表されたが、最終的に北米全体が貿易において競争力を失いアジア圏などに対し大きく後れを取り、カナダ経済に大きな影響を及ぼすことは必須である。

市場では13、14日に開催されるFOMCでの利上げがほぼ100%で織り込み済みだが、今回、政策金利発表に伴い経済見通しや政策金利見通し(ドットチャート)の公表、イエレンFRB議長の記者会見も予定されているので注目はそこに集まっている。もしもドットチャートの分析引き下げ、ハト派(慎重)発言があれば一時的にもUSDドル下落の可能性も。

11月30日、石油輸出機構(OPEC)は総会で、予想通り協調減産の期間を2018年の3月末から更に9か月延長することで決定、原油価格(WTI)は引き続き1バレル57ドル台で堅調に推移している。原油価格の現状での安定が見込まれることから今後のカナダドルはコモディティ価格よりも経済データの結果に左右されると見られる。

今月のつづき(現地からの声)

『当地のここが好き!』

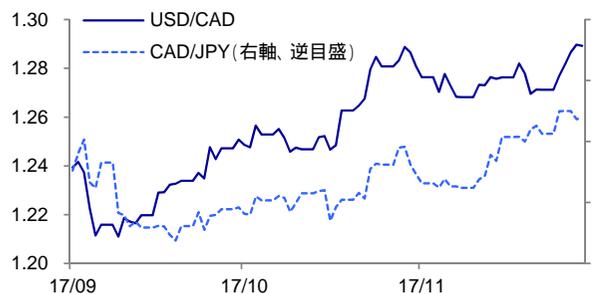
カナダの好きなところは山ほどあるのですが、今回は近年とても活気のあるカナダのクラフトビールについて語りたいと思います。ここ10年でカナダのマイクロブルワリーは爆発的に増えました。2006年に88件しかなかったのが、2015年の調べではなんと520件のマイクロブルワリーが確認されています。2017年はトロント市内だけでも10件のマイクロブルワリーがオープン。ビール好きの呑兵衛には嬉しいお話です。

私がカナダのクラフトビールにハマったのは2015年ごろ、会社近くのクラフトビールを扱うビアパブに行ったことがきっかけです。それ以前もビールは時々飲んでいましたが特に好きとか、日本酒のように味わって飲むという感じではありませんでした。もちろん仕事終わりの一杯目と夏の暑い日の一杯目は別格ですが…。

そこで地元オンタリオ州のブルワリーが作ったインディアペールエール(IPA)をはじめ飲んだ時の衝撃はかなり大きく、大きさにも「こんなに芳醇で味わい深いビールが世の中には存在するんだ」と感動した覚えがあります。ちなみにその時に飲んだビールはGreat Lakes Brewing Company (GLB) というところの「Canuck」というビールで、こちらは今でも私の一番好きな銘柄です。ビールの種類が沢山あると逆に選ぶのが困ることがあるかもしれませんが、トロントのバーやパブでは気になる味のビールがあれば、多くの場所が少量を味見させてくれます。もしカナダのクラフトビールに馴染みが無い方はそういう場で積極的に色々な種類を試してはいかがでしょうか? 結構ハマると思いますよ? トロント周辺ではAmsterdam BrewHouse、上記のGLB、Bellwods brewery、Duggans's Breweryなどが個人的にお勧めです。

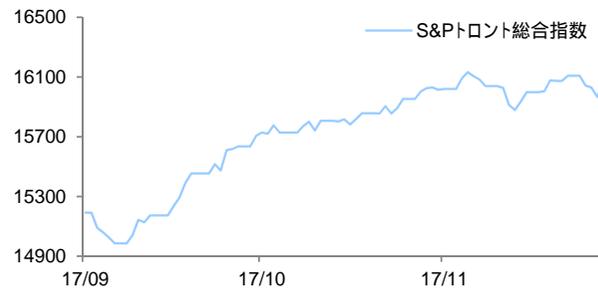
為替の動き

(資料) ブルームバーク



株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/3	国際商品貿易	9月	-3.00 b	-3.18 b	-3.41 b
11/3	雇用ネット変化	10月	15.0 k	35.3 k	10.0 k
11/3	失業率	10月	6.2%	6.3%	6.2%
11/16	製造業売上高(前月比)	9月	-0.50%	0.50%	1.60%
11/17	消費者物価指数(前年比)	10月	1.40%	1.40%	1.60%
11/17	消費者物価指数コア(前年比)	10月		1.60%	1.50%
11/23	小売売上高(前月比)	9月	1.0%	0.1%	-0.3%
11/30	経常収支	3Q	-20.00 h	-19.33 h	-19.32 h
12/1	GDP(四半期)	3Q	1.6%		4.5%

韓国ウォン相場

予想レンジ:	USD/KRW	1060	~	1100	(注)100韓国ウォンあたりの対円レート
	KRW/JPY	10.10	~	10.60	
	JPY/KRW	9.43	~	9.90	

ソウル資金室 下山 泰典

先月の為替相場

11月のドル/ウォンは大きく下落(ウォンが対ドルで上昇)。11月のドル/ウォンは、1118.00でオープン。10月の韓国中銀(BOK)において早期の利上げ観測が急速に高まった流れを引き継ぎ、ウォン買い優勢に推移。しかし、2・3日と節目とされた1110に迫る局面では下抜けで跳ね返されたことから、6日には一旦ウォン売りの流れとなる。その後、7日には再度1110を攻めるも攻め切れず、13日にかけて市場は調整モード。しかし、1120を上回った同日には反転の兆しを見せ、16日の市場オープン時にはついに1110を割り込んで取引を開始。この水準では韓国中銀等による何らかのアクションも懸念されたものの、特段意識されるようなものはなく、市場は新しいポイントを目指してウォン高方向に進行。ついには2016年の安値も下抜けし、29日には一時1075.50まで下落した。

なお、29日日本時間未明には北朝鮮による新型ミサイルの発射があったが、市場への影響は限定的だった。

このようなウォン高の中で迎えた30日のBOKの金融通貨委員会。大方の市場予想どおりに25bpの利上げが決定された。注目は今後の利上げ見通しであり、BOK総裁の会見では、委員の中で1名が反対に回り全会一致での決定でなかったことが強調されるなど慎重さの見えるものではあったが、追加利上げの可能性を排除はしなかった。この日、1081.50でオープンしたドル/ウォン相場は、一旦は利益確定等を含めて1090.20までウォン安方向に動いたが、徐々に下げ止まり、1088.20でクローズした。

今月の見通し

12月のドル/ウォン相場は、基本的には上値の重い(ウォンの底堅い)展開を予想しているが、北朝鮮を巡る地政学的リスクの高まりによる急騰(ウォンの急落)には引き続き警戒したい。

11月のドル/ウォン相場は大きくウォン高に動いた。背景は、韓国中銀による利上げ観測が急速に高まり、30日には実際に25bpの利上げがなされたことが大きいだろう。2-3ヶ月前までは利上げを意識する市場参加者はほとんどいなかった認識だが、10月の金融通貨委員会(韓国中銀が政策金利などを決定する会合)以降、市場で急速に利上げムードが高まった。2012年以来利下げを続けてきた韓国であり、11月30日の委員会後のBOK総裁会見では今後の利上げについて慎重姿勢も見せた。しかし、追加利上げについて否定はしておらず、足元の堅調な韓国経済や文政権の政策等から、市場では来年初旬の追加利上げを見込む筋も少なくはない印象。韓国経済についてはIMFが10月の世界経済見通しで発表した韓国の2017年GDP見通しを11月に早速上方修正するなど(3.0%→3.2%)、足元の堅調さは広く認識されているところ。地政学的リスクの高まりから一旦は流出が確認された外国人投資家のフローも徐々に戻ってきており、ドル/ウォン相場の基本線はウォン買い優勢とみている。

ただし、冒頭にも書いたとおり、地政学的リスクが高まる可能性は常に意識する必要がある。11月の北朝鮮による新型ミサイル発射に対する市場の反応は限定的ではあったが、ミサイルの性能も着実に向上しているとの報道もある中、今後の米朝や国連安保理等の動きからは引き続き目が離せない。

以上を勘案、ドル/ウォン相場の基本線は上値重くウォン買い優勢と考えているが、ウォン急落の可能性にも常に注意を払っておきたい。

今月のつづやき(現地からの声)

『当地のここが好き!』
 ~オンドル~
 ついに冬がやって来た。11月にもかかわらず既に氷点下の日々が続いている。ソウルと東京の冬は、寒ければ厚着をし温かいものを食べるといった点では変わらない。ただ、日本での生活の経験がある私としては東京の冬のほうが寒く感じたのである。それは、他でもない家の中の環境、特に韓国独特の「オンドル(床暖房)」が日本にはないから。日本ではコタツや電気ストーブなどで冬を耐えてきたが、やはり床の暖かさには勝てない。最近では日本でも新築マンションのリビングに床暖房をオプションとして登場させたことを知人を通じて耳にしたが、韓国のオンドルは基本的に冬中つけっ放しであるため、自宅に帰ると部屋の中は常に暖かい。15年前の冬に遡るが、娘を日本で産んだときの妻の声が残りに耳に残る。「あったかいオンドルに寝転がりたいな〜・・・」。妻が韓国への帰国を決心した本当の理由の一つかも。。。 (李サンラク)

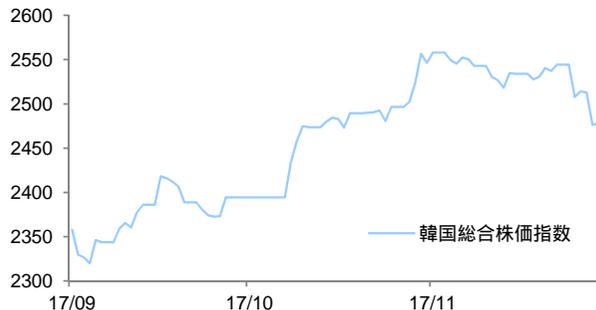
為替の動き

(資料)ブルームバーグ



株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	輸出(前年比)	10月	15.6%	7.1%	35.0%
11/1	輸入(前年比)	10月	14.8%	7.4%	22.6%
11/7	トランプ大統領 訪韓	-	-	-	-
11/15	失業率(季節調整済)	10月	3.7%	3.6%	3.7%
11/30	BOK金融通貨委員会	-	1.50%	1.50%	1.25%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 29.90 ~ 30.50
TWD/JPY 3.61 ~ 3.80

台北資金室 三浦 勇二

先月の為替相場

11月のドル/台湾ドル相場は、ドル安台湾ドル高。

30.169でオープンしたドル/台湾ドルは、月初に11月FOMCで利上げが見送られ、フェデラルファンド金利誘導目標が1.00-1.25%で維持されたことや、次期FRB議長にパウエルFRB理事が指名されたものの、ともに事前の予想通りであったことから相場への影響は限定的となり、30.1台の小幅なレンジでの推移となった。

また、11/3に発表された米10月雇用統計についても、平均時給が前年比+2.4%と賃金の伸び悩みが示される結果となったが、大きく相場を動かす材料とはならず、週明け11/6の台湾市場でもレンジ内での推移が続く展開となった。その後、月半ばにかけても、新規材料が少ない中、ドル/台湾ドルは30.1台後半を中心とした方向感のない値動きが継続。

月後半に入ると、米税制改革法案の上院での審議に関し、共和党のジョンソン議員などが反対姿勢を示したことなどをきっかけに米金利が低下すると、ドル/台湾ドルも軟化。さらに、台湾株への外国人投資家の資金流入や、11/22のイエレンFRB議長の講演でのハト派的な発言、11月FOMC議事要旨においてインフレ率の低迷が中期的に継続するリスクを指摘した参加者が少なくなかったことが明らかになり、ドル安が進んだことも相俟って、台湾ドル高圧力が強まると、11/22には9/8以来の30を割れる場面も一時的にみられた。

その後の取引日においても、取引時間中に30を割る場面が続いたが、そうした水準では輸入企業のドル買いなどが下支えとなり、クローズベースでは30台を維持する展開となった。

今月の見通し

12月のドル/台湾ドル相場は、底堅い推移の継続を見込む。

11月に発表された台湾の経済指標をみると、10月の輸出額が前年比+3.00%と13か月連続でのプラス成長を記録するも、前月(同+28.10%)から伸びは大きく鈍化。前年は台風の影響で10月に輸出が大きく伸びていたことから、比較対象となる数値が高かったことが鈍化の主因であり、主力の電子部品は同+10.60%と好調を維持している。貿易収支も52億ドルの黒字となり、過去最大となった前月から減少したものの、高水準を維持。なお、10月の消費者物価指数は前年比-0.30%と2017年2月以来のマイナスとなった。

12月は引き続き、米税制改革に関する議論の行方や台湾の株式市場における外国人投資家の資金の動向が注目される。

米下院では、税制改革法案が11/16に可決されており、両院協議会の開催に向け、一部の共和党議員からの反対姿勢が示されている上院で可決が進むかが注目されている。税制改革については、市場での織り込みはまだ十分に進んではないとみられ、審議が進展しトランプ政権が目指す年内法制化の実現が見込まれれば、ドル高材料となることが想定される。

一方、台湾株における外国人投資家の資金については、2017年後半に入り、月間ベースで流出超となる月が増えてきている(7月以降は10月を除き流出超)。一方、足元株が年初来高値を更新する場面では、資金流入も膨らみ、為替市場へも大きく影響を及ぼしており、その動向が注目される。

なお、12月下旬には四半期に一度の台湾中央銀行金融政策決定会合の開催が予定されているが、政策金利は1.375%での現状維持が見込まれており、相場への影響は限定的となるだろう。

今月のつばやき(現地からの声)

『当地のここが好き!』

台北はいいところはなんといっても日本人にとって生活がしやすいところです。

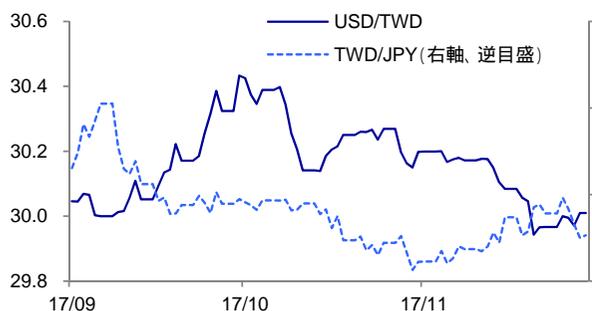
食事については、台湾のローカルフードは日本人にとってはやや薄味というところも多いですが、臭豆腐などのおいしい強い食べ物を除けば日本人の口に合う料理がほとんどかと思えます。また、寿司、ラーメンをはじめ、日本食のお店も非常に多く進出してきておりますので、日本食が食べなくなったら、いつでも食べられるといったところも便利です。

買い物についても、台北はデパートやコンビニがとても多く、日本の物も数多く販売されており、少し割高ではありますが、入手に困ることは少ないです。

また、交通事情も便利です。地下鉄は台北市内で5路線走っているほか、バスの路線も乗りこなすのが困難なほど多いです。また、タクシーも日本と比べると料金が安い上、走っている台数も多いので、配車アプリなどを使わずとも乗りたいときにはすぐ捕まえることができるのもいいところではないかと思えます。

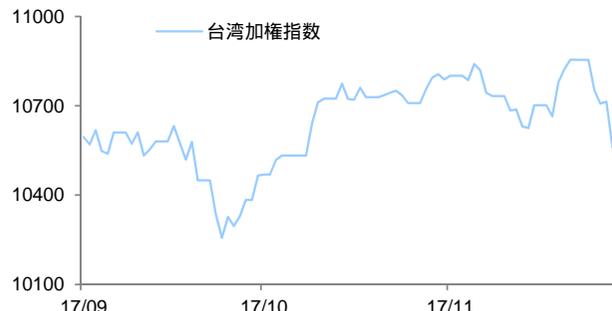
為替の動き

(資料)ブルームバーグ



株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/6	外貨準備高	10月	-	447.79B	446.22B
11/7	消費者物価指数(前年比)	10月	0.20%	-0.32%	0.50%
11/7	輸出(前年比)	10月	7.00%	3.00%	28.10%
11/7	輸入(前年比)	10月	2.10%	0.10%	22.20%
11/7	貿易収支	10月	5.85B	5.20B	6.69B
11/20	輸出受注(前年比)	10月	7.80%	9.20%	6.90%
11/22	失業率	10月	3.70%	3.69%	3.71%
11/23	鉱工業生産(前年比)	10月	4.50%	2.85%	5.24%
11/24	GDP(前年比)	Q3	3.10%	3.10%	3.11%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7950 ~ 7.8300
HKD/JPY 14.05 ~ 14.60

香港資金部 Ken Cheung

先月の為替相場

【11月の香港ドル直物相場】

ドル／香港ドルは企業の新規株式公開に伴う香港ドル買いの動きを背景に、約6月ぶりとなる7.7921水準まで香港ドル高が進行したが、買い一巡後はじりじりと下落する展開に転じ7.81水準まで香港ドル安となった。中国の金融規制強化を巡る懸念や一部金融機関のポジション調整等からオンショア市場の流動性が一時逼迫し、人民元調達（香港ドル売り／人民元買い）の動きが強まる中、ドル／香港ドルフォワードの1年物は+100ポイント上昇し▲400ポイント水準となった。総じて、根強い香港市場に対する資金流入の継続が、過度な香港ドル高を抑制している格好。

【11月の香港ドル金利市場】

企業の新規株式発行に伴う香港ドル買い一巡後、人民元調達に際する香港ドル需要の高まりから、香港のHIBOR1か月物は0.7%付近まで一旦低下後1.0%付近まで大きく上昇した。斯かる中、LIBORとHIBORの1か月物の金利差は縮小し、約0.38%と0.10～0.15%程度縮小した。香港金融管理局（HKMA）は、為替基金短期証券の3度目の追加発行を見送り、インターバンク市場の流動性を図る指標であるHKMAの当座預金残高は、約1797億香港ドルと小幅な動きに留まった。香港ドルスワップ金利の3年物は、1.6%付近まで一時低下したものの1.8%付近まで反発する展開となった。ドル／香港ドルの通貨ベースは、海外勢による債券発行に係るヘッジフローが一服したことから相対的に安定した推移となった。

【11月の香港株式市場】

ハンセン指数は、根強い香港市場に対する資金流入の継続から、30,000水準を超えて最高値を更新した。中国本土上場の人民元建て株式（A株）に比し、中国本土（上海）市場からの香港株取引の増加が同指数の押し上げに寄与したものと考えられる。今後、強気なセンチメントが香港株の上昇を牽引する一方、年末にかけては利益確定売りの動きも散見されると想定する。

今月の見通し

【12月の香港ドル直物相場】

ドル／香港ドルの取引レンジは、7.795から7.830を想定する。14日に予定されているFOMCにて米国の政策金利引き上げが相応に織り込まれている中で、香港金融機関における香港ドル金利の引き上げ時期及びペースに注目が集まろう。一時的に7.830水準まで香港ドル安が進行する局面においては、HKMAにおける為替基金短期証券の追加発行の再開等より、市場の安定に資する施策を講じてくるだろう。企業の新規株式公開に伴う香港ドル買いの流れが一巡する中で、総じて香港ドル金利と米ドル金利の金利差の動向に振らされる展開となる。

【12月の香港ドル金利市場】

FRBによる12月の利上げが相応に織り込まれている中で、米ドル金利上昇に追随する格好で香港ドル金利も徐々に上昇する展開となる。加えて、HKMAが為替基金短期証券の追加発行を実施し、資金吸収を段階的に実施することで、香港ドル金利を徐々に引き上げていく可能性も想定したい。一方で、HKMAの為替基金短期証券の追加発行により、HKMAの当座預金が大きく減少し、流動性の逼迫から短期ゾーンを中心に香港ドル金利が過度に上昇する展開には要注意。

今月のつづやき（現地からの声）

『当地のここが好き！』

香港は世界で最も忙しい都市の一つであり、食や交通等にこういった光景が見取れる。

フィッシュボール等といった簡単なおやつは道路沿いの屋台で簡単に見つけることが出来、通勤時の朝ごはんによく見かける。

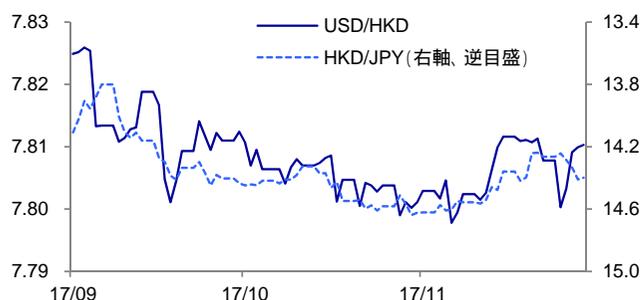
地下鉄（MTR）も、朝のラッシュ時には間隔1分という早さで回転している。

香港人自身も、エスカレーターでは止まらずに歩き続ける人が多く、エレベーターではドアを開けるボタンをすぐに押す光景もしばしば。

一方で、お昼ごはんや夕飯は、皆で仲良くゆっくり食べる習慣がある等、忙しさと緩さを兼ね備えたライフスタイルが香港の魅力だと思います！

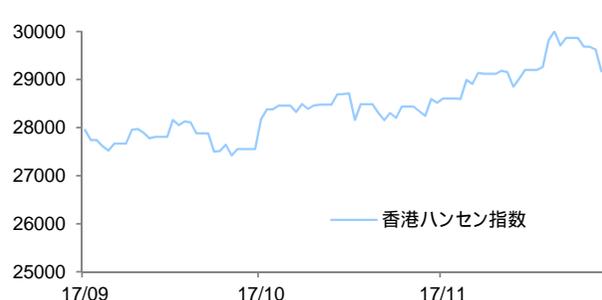
為替の動き

（資料）ブルームバーグ



株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



先月の注目イベント

（資料）ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/3	小売売上高(価格、前年比)	9月	1.0%	5.6%	2.7%
11/3	小売売上高(数量、前年比)	9月	1.4%	5.5%	3.2%
11/7	外貨準備高	10月	-	\$419.2b	\$419.3b
11/10	GDP(季調済/前期比)	3Q	0.6%	0.5%	1.1%
11/16	失業率(季調済)	10月	3.1%	3.0%	3.1%
11/17	総合利率	10月	-	0.5%	0.3%
11/21	CPIコンボジット(前年比)	10月	1.7%	1.5%	1.4%
11/27	輸出(前年比)	10月	10.1%	6.7%	9.4%
11/27	輸入(前年比)	10月	9.5%	7.9%	9.7%
11/27	貿易収支(HKD)	10月	-41.9b	-44.0b	-44.7b

中国人民元相場

予想レンジ: USD/CNY 6.4500 ~ 6.8500
 CNY/JPY 15.77 ~ 17.83
 100JPY/CNY 5.6100 ~ 6.2200

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 馬場 一樹

先月の為替相場

【為替相場】

11月のドル/人民元相場は、海外市場でのドル売りを背景にドル安人民元高が進行。

2日、当局がドル人民元仲値を大幅に人民元高へ設定したことを受け、ドル人民元は一時6.59割れまでドル安人民元高が進行。しかし、水準はすぐに巻き戻され、その後は前半を通じて概ね6.63から6.65のレンジ内での推移となった。米国では税制改革法案が発表となり、また、トランプ大統領がパウエルFRB理事を次期FRB議長に指名した。しかし、市場の反応としては、上記は概ね予想通りとして限定的だった。13日には、好調な独7~9月期GDPを受けてユーロ高ドル安が進行。ドル人民元も、欧州通貨中心としたドル安を受けてドル/人民元は一時6.62を割れる水準までドル安人民元高が進行。しかしその後は再び6.63台まで値を戻した。22日に米国での弱い経済指標やハト派なFOMC議事用紙を背景にドル安が進行。ドル/円が111円近辺までドル安円高となる中、ドル/人民元も海外市場のドルの動きにつられる形で水準を切り下げ、一時6.58割れまでドル安人民元高が進行した。

【金利相場】

月初の人民元金利は、10月末を越え中資系大手行が資金放出に転じたこと等から資金需給は緩和し、金利は小幅に低下。しかし、次第に資金調達動きが見られ始めると、資金需給は徐々にタイト化し、資金金利はO/N物中心に上昇した。その後、中資系大手行が資金放出を再開したことに加え、公開市場操作が連日のネット資金供給となったことで地合は緩和し、金利は小幅に低下した。月後半にかけては、月末越えおよび年末越えの資金ニーズが強まり、市場の需給はタイト化。資金金利はターム全般にじりじり上昇する展開となった。

今月の見通し

【為替相場】

12月のドル/人民元相場は、中国株価動向及び各国中銀イベント後のドルの動きを注視。

月前半は米雇用統計等重要な米経済指標や、中国でも各種指標が発表される予定であり、指標発表後のドル及び人民元への影響を注視。FOMCではほぼ利上げが織り込まれている状況下、記者会見や声明文の内容次第ではボラタイルな動きが出る可能性もあり、その他にもECB理事会や日銀等主要国の政策会合が予定されているため、イベント通過後の各通貨の相場動向には注意。また、11月後半に中国大型株が1日で3%下落するなど、中国株価が不安定な動きを見せており、リスク資産動向の動きには警戒。中期的には、当局は過剰投資・過剰生産能力の削減、金融システムリスク防止に向けた債務圧縮等、政策を強化していく見通しであり、経済成長の鈍化が懸念されることから、ドル人民元は安定ながらも緩やかな人民元安の見通し。月内には中国経済工作会議が開催される予定であり、引き締め的な経済政策が打ち出される可能性もあるため、注意が必要。

【金利市場】

月初は月末の資金需要が緩和され、一旦は金利低下方向か。但し、年末が近づく中、年越えの資金調達ニーズの高まりや、当局による過剰債務問題の解消を企図した金融政策引き締めの可能性も想定されることから、月後半にかけては金利上昇圧力が高まる展開か。

今月のつづき(現地からの声)

『当地のここが好き!』

個人的に好きな部分を挙げるとすると、「便利さ」ではないでしょうか。上海に来て7ヶ月が経ちますが、中国の生活における便利さは、過去経験したことのないくらい発展しています。まずは決済。基本的な決済はほぼアプリで完結します。レストランや街中の出店、友人とのお金のやり取り、携帯料金の補充、タクシーの支払い等々、全てが簡単に短時間で出来ます。また、履歴が残っているので、資金の入り払いも明確になります。飛行機や新幹線、その他ホテルやWifiのレンタル等も一つのアプリで全て完結します。当然、決済もアリペイやWechatと連携していますので、アプリ内で全て完結。上海ディズニーランドでは専用のアプリをダウンロードすれば、チケット購入やファストパスの取得、アトラクションの現在の待ち時間やショーの予定などさまざまな情報がリアルタイムで入っています。家にいて外に出たくない時も、食事の際はアプリでお店を指定し、買って家や会社まですぐに運んでくれますし、買い物も勿論アプリひとつで出来ます。電車に乗る際の切符や交通カードも、いずれは携帯アプリで済むようになると聞いています。他にも様々な「便利さ」がありますが、紹介しきれないのでこの辺りにしておきます。是非中国に足を運んで、実感してみてください。

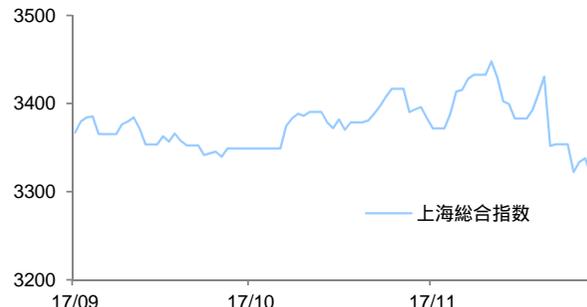
為替の動き

(資料)ブルームバーグ



株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/8	貿易収支(RMB建)	10月	280.5B	254.5B	193.0B
11/8	輸出(RMB建)(前年比)	10月	7.0%	6.1%	9.0%
11/8	輸入(RMB建)(前年比)	10月	17.5%	15.9%	19.5%
11/9	CPI(前年比)	10月	1.8%	1.9%	1.6%
11/9	PPI(前年比)	10月	6.6%	6.9%	6.9%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3350 ~ 1.3650
SGD/JPY 81.50 ~ 83.50

アジア・オセアニア資金部 鈴木 教子

先月の為替相場

10月末に対ドルで3か月半ぶり安値をつけていたシンガポールドル(SGD)相場は、11月は一転してSGDが堅調推移。

月初SGDは1.36台前半でオープン。FOMCでは景気認識に関する文言が上方修正され12月の米利上げが確実視される一方で、次期FRB議長としてハト派のパウエル氏が指名が濃厚となり、利上げペースは緩やかになるとの見方からドルが弱含み推移。2日は、トランプ大統領のアジア歴訪を控えて中国人民銀行が人民元を強め誘導するとの思惑から人民元が上昇し、これらの流れの中でSGDも1.35台後半までSGD高が進んだ。しかし、3日発表された米10月雇用統計は、非農業部門雇用者数が過去の上方修正を加味すると良好な内容であったことや、10月ISM非製造業景況指数も予想を上回ったことで、1.36台半ばまでドル高となって越週した。

第2週は、前週末からのドル買いの流れを引き継いで6日に1.36台後半のSGD月間最安値をつけて始まるも、売りの勢いは続かなかつた。9日に米上院が税制改革法案を発表したが、法人税の引き下げ時期などで上下院案に相違があり、調整が難航するとの懸念がドルを圧迫。週後半は1.36近辺でレンジ取引となった。

第3週は、SGDが堅調推移。14日発表された独7～9月期GDPが予想を上回り、ユーロが大幅高となったことや、17日にトランプ政権のロシア疑惑を背景にドル安が進んだことの影響で、SGDも1.35台前半まで続伸した。

第4週は、SGDが一段高となった。アジア各国の7～9月期GDPが軒並み好調なことを背景に、アジア通貨が全般的に底堅く推移。加えて、22日に公表されたFOMC議事録(10/31～11/1分)の中で、これまで以上に慢性的なインフレ低迷リスクへの懸念が示されていたことを受けて対主要通貨でドルが急落する中、SGDも連れて1.34台後半へ突入。不透明感が強まっていた独政局が、与党と野党第1党の大連立樹立への動きが見得たことからユーロが急伸したこともSGD高材料となり、24日に2か月ぶり高値1.34台半ばをつけた。その後は月末を控えて、同水準で小動きとなっている。

今月の見通し

12月のシンガポールドル(SGD)相場はクリスマス休暇入りで概ね小動きを予想。

12月の米FOMCにおける25bpの利上げはほぼ確実と見なされており、相場には織り込み済み。焦点は今後の利上げペースであり、経済指標を見ながらの運営となろうが、メンバーの間で「物価低迷は一時的」との見方が後退しつつあることや、ハト派のパウエル氏が次期FRB議長に決定したことで、利上げペースは緩やかなものとなるのが予想される。

シンガポール経済については、予想以上に堅調となっている。7～9月期GDPが約4年ぶりの高水準となる前年比5.2%の伸びとなり、通商産業省は2017年の成長見通しを従来の2～3%から3～3.5%に上方修正した。一方で、インフレは依然として低水準で推移しているが、GDPの上振れでMASがSGD高誘導を再開する可能性は依然に比べて高まっている。これらのことから12月もSGDが底堅い推移が続きそうだ。

とはいえ、過去4か月間に亘りほぼ1.34から1.37のボックスレンジで持ち合い相場が続いており、大きな動きは予想し難い。クリスマス休暇に向けて動向が低下し、日毎に膠着感が強まって行くものと思われる。

注目イベントは、米11月雇用統計(8日)、FOMC(12～13日)、ECB理事会(14日)。

今月のつづやき(現地からの声)

『当地のここが好き!』

シンガポールについては、非常に抽象的になってしまっていますが何事も便利ということにつきると思います。

例えば、まず空の玄関チャンギ国際空港ですが、とにかく近いですし、渋滞もありません。ですので、空港を利用する際にはフライトの1時間30分前にできれば全ての手続きが滞りなく完結、軽くお茶もできてしまうくらいです。さらにシンガポール人やビザを持つ外国人は自動化されたイミグレを通過でき、殆ど待ちません。

また街中の交通事情でも、地下鉄(MRT)は現在でも拡張工事中で、殆どの主な場所を網羅しています。さらに地下鉄で補えない部分はバスが走ってますし、タクシーも比較的リーズナブルな値段で利用できます。加えて最近ではレンタル自転車も登場、逆に便利すぎて足が退化するのは心配してしまうくらいです。

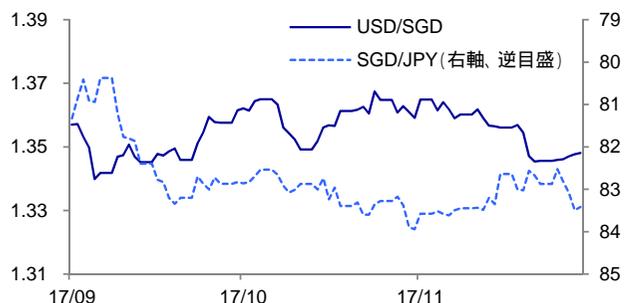
休日でも例えばゴルフを楽しむと思えば、最短で15分もあればゴルフ場に到着できます。ですので朝7時からプレー開始すると、昼食も済ませて13時には帰宅可能です。場所にもよりますがもちろんカート乗り入れ可能ですし、カートにはコースガイドが搭載されており、残り距離なども表示されます。こちらも本当にゴルフとはほど遠く、カートで移動したクラブを振り回すだけなので、スポーツというよりもサウナに近い感じでしょうか。

一方で、巷で言われているようにやたら物価が高かったり、冷房が効きすぎているなどの難点もありますが、個人的にはシンガポールの圧倒的な便利さ大好きです。

(宮地 崇)

為替の動き

(資料) ブルームバーク



株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/2	購買部景気指数	10月	51.9	526.0	52.0
11/2	電子産業指数	10月	-	53.3	53.6
11/10	小売売上高(前年比)	9月	3.0%	-0.5%	3.7%
11/17	非石油輸出(前年比)	10月	11.9%	20.9%	-1.1%
11/23	CPI(前年比)	10月	0.5%	0.4%	0.4%
11/24	鉱工業生産(前年比)	10月	16.0%	14.6%	14.4%
11/23	GDP(前年比)	3Q	5.0%	5.2%	4.6%

タイパーツ相場

予想レンジ: USD/THB 32.30 ~ 33.50
THB/JPY 3.35 ~ 3.50

バンコック資金室 山崎 浩幸

先月の為替相場

○ドルパーツは33.00を割込み、2015年4月以来の安値圏へ下落
1日、朝方33.20付近であったドルパーツは、タイ10月CPIが0.86%(予想0.83%)と予想を上回ったことを材料にパーツ高が進み、一時33.10付近まで下落。2日にはアピサク財務相は第3四半期のGDPは前年比4%2017年の経済成長率も3.8-3.9%に到達するとの見方を示すも相場への影響は限定的。翌3日は米10月の雇用統計が発表され、米国の労働市場の堅調さが意識されドル買いが進み、33.20付近まで上昇。その後は33.10台前半での推移が続いた。8日にはタイ中銀金融政策決定会合(MPC)が開催され、前回一致で政策金利の据置(1.5%)が決定されるも相場への影響は限定的であった。9日には、米国で米税制改革案で法人税引き下げが2019年に先送りされるとの報道から米株が下落し、ドル売りが進むと水準を33.10付近へ水準を切り下げた。週が変わって、13日に入ると日経平均株価が下げ幅を拡大し、ドル円が下落する動きにドルパーツも軟調な展開となり33.00台半ばへ下落。翌14日の海外時間にIEAによる今年・来年の石油需要見通しが下方修正されると原油価格が下落し、米株が軟調となると、ドルパーツも33.00台前半へ下落し、その後もじり安の展開が続くも33.00ちょうど付近で底堅い値動きが続いた。16日には、米国の冴えない経済指標の発表からドル売りが進み、33.00を突破し32.90付近まで下落。その後も米大統領選挙におけるロシア介入疑惑の再燃などを材料に、じりじりと下落が続き、32.70台半ば付近まで下落した。翌20日に入って、一時32.80付近へ値を戻す場面も見られたが、国家経済社会開発委員会(NESDB)が発表した2017年第3四半期GDPが前年同期比4.3%となり第2四半期の3.8%から伸びが加速したこともあり、ドルパーツは32.70台半ばへ下落した。22日にはタイ工業連盟(FTI)が2017年の自動車生産見通しを従来の193万台から195万台に情報修正すると発表される等、タイ経済の先行きへの明るい見通しが意識され、海外投資家からタイ国債やSETへの資金流入が相次ぎパーツ高の流れが継続し、一時32.50付近まで下落するもその水準では戻され、現在は32.60台半ば付近での値動きが続いている。

今月の見通し

○32.50付近での攻防が続く
前月の、ドルパーツは33.00を割込み2015年4月以来の安値までパーツ高が進んだ。11月20日にタイ第3四半期のGDPが発表、前年同期比4.3%、先行きの見通しも引き上げられ、タイ経済がゆるやかに回復している様子を確認すると、海外投資家のフローもタイへ戻っており、パーツが買い進んでいるもの。この約半月で0.50ポイントものパーツ高が進んでおり、動きが急ピッチであることから、32.50レベルでは一旦、下支えされるのではないかと予想。また、年末を控えてマーケット参加者が乏しいこと、FOMCで利上げが予想されていることから32.50付近を底値として、FOMCまでは調整からドル買いも相応に見込まれる。しかし、FOMCで利上げが確認された後は再びパーツ高に反応し、32.50付近での攻防が続いていくものと予想。一方で、2017年に入ってからドル安パーツ高基調が続いており、ドル売り需要も相応にある中で、決算末を控えたドル売りも相応にできることも見込まれることも考慮し、12月は32.50付近での攻防が続いていくものと予想する。また、海外からの資金流入が続いていることから、パーツ高圧力は継続しているため、32.30レベルのパーツ高までは想定したい。

今月のつづき(現地からの声)

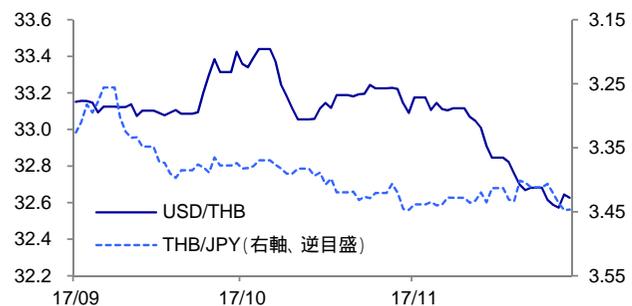
『当地のここが好き!』
今月のお題を考えたときに、いろいろとあって何を書けばいいのかよく分からないというのが本音ベースではありません。

- 食事がおいしい
- 近くに観光施設がいっぱいある
- 自然がいっぱいある
- 1年中暖かい
- 親日的である
- 物価が安いetc

いろいろありますが、の中で「ここが好き」ともっとも言えるポイントは、「タイの人」だと思います。タイの方々は他人に親切であることが多いです。特に子供(幼児)が相手だと、どんなにこわもての人でもにっこり笑ってあやしてくれます。電車の中で泣いていても、回りの人が助けてくれますし、妙な緊張感とかを感じることなく、非常にあたたかい雰囲気があって大変住みやすいと感じます。やはり、微笑みの国と言われるだけあって、笑顔があふれています。しかし、笑顔にだまされてうまい話とかに載ってしまうと思わぬアクシデントに巻き込まれかねませんので、観光でいらっしゃる際にはくれぐれも注意してください。

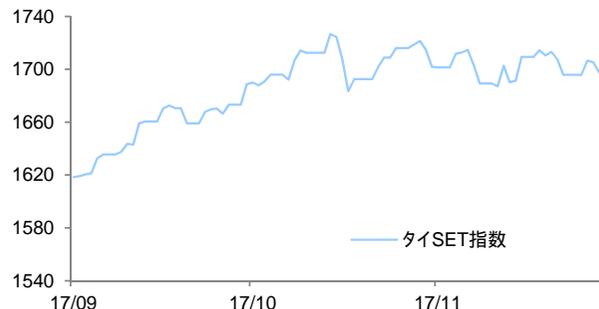
為替の動き

(資料)ブルームバーグ



株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	消費者物価指数(前年比)	10月	0.83%	0.86%	0.86%
11/1	CPIコア(前年比)	10月	0.59%	0.58%	0.53%
11/8	MPC(タイ中銀政策決定)	11月	1.50%	1.50%	1.50%
11/9	消費者景気信頼感	10月	-	64.10	62.50
11/22	自動車販売台数	10月	-	68,551	77,592
11/20	GDP	3Q	3.90%	4.30%	3.70%
11/22	輸出(通関ベース/前年比)	10月	14.60%	13.10%	12.20%
11/30	輸出(前年比)	10月	-	13.40%	13.40%
11/30	経常収支	10月	\$3,000M	\$3,535M	\$6,287M

マレーシアリング相場

予想レンジ: USD/MYR 4.0500 ~ 4.1500
 MYR/JPY 26.51 ~ 28.00
 JPY/MYR 3.5700 ~ 3.8400 (100円あたり)

マレーシアみずほ銀行 山田 輝彦

先月の為替相場

10月のリングgitは大きくリングgit高が進行した。

月初のリングgitは先週末に米国でロシア疑惑が再燃したことや米税制改革法案の内容が後退するとの懸念でドル売りとなったことで、4.23ちょうどレベルでスタートしたが、その後は週後半に控える重要イベントを前に動意に欠ける展開となった。米現地時間1日のFOMCでは事前予想通り政策金利は据え置かれ、景気認識は上方修正したもののインフレ見直しには慎重であったこと、同じく2日にはパウエル氏が次期FRB議長に指名されたが現状の金融政策が踏襲されるとの見方で、何れも相場に与える影響は限定的で4.23ちょうどを挟むレンジ取引が続いた。週明け6日も3日に発表された10月米雇用統計がまちまちの結果だったことで相場に方向感を与えるには至らず、リングgitも同じレベルでの推移が続いたが、9日の金融政策会合の声明文で来年以降の利上げ期待感が浮上したことで、発表後にリングgitは4.22台後半から4.20台半ばまで買われ、10日もその流れが続く中、結局4.19台前半で取引を終えた。

月半ばに入ってもリングgitは動意に欠け4.19ちょうどを挟み膠着感の強い相場展開が続いたが、15日は寄付きから意識されていた4.18ちょうどを割ってスタートする展開にリングgitは4.1735まで買い進められた。16日以降もリングgit高優勢の展開は変わらぬ中、17日には発表された第3四半期GDPが事前予想を上回る非常に強い内容であったことで約13ヶ月ぶりとなる4.1630を付けると、結局4.16台半ばで取引を終えた。

月後半に入っても先週の流れを引継ぎリングgit高に推移した。特段大きな材料もない中、対主要通貨でのドル売りの流れにリングgitは一段高の展開となり、23日には前日海外時間の米FOMC議事録で中長期的なインフレ低迷のリスクが指摘されたことで一段とドル売りが強まるとリングgitは一時4.0970を付けた。しかし24日にはドル売りに巻き戻しが入ったことで大きく買われていたリングgitにも調整が入る格好となり、結局4.11台後半で取引を終えた。

27日現在、リングgitは4.11台半ばで推移している。

今月の見通し

12月のリングgitは11月の急激なリングgit高への反動は意識しつつも、基本的にはリングgit高相場が続くことを予想。

11月に開催された金融政策会合の声明文で利上げ期待感が高まったことに加え、その後発表された7~9月期GDPが前年同期比+6.2%と非常に強い内容であったことで、リングgitは11月単月で1,000ポイント以上のリングgit高を演出した。

12月も引き続き上記要因を背景にリングgit高圧力は継続すると見るが、過去の動きに照らすと単月で1,000ポイント以上動いた翌月は反発する傾向もあり、場合によっては調整色が強まることには留意しておきたい。

米国では現地時間13日のFOMCで利上げが確実視されているが、直近のFOMC議事録で中長期的なインフレ率の低迷が指摘された。仮に利上げが実施されたとしても来年以降の利上げペースが鈍化するという見方が広がるようであればドル売りに繋がりがかねない。ロシア疑惑も再燃し政権基盤が揺らぐ中、リングgit動向を考える上で引き続き米国動向には注意を払っておきたい。

今月のつばやき(現地からの声)

『当地のここが好き!』
 漠然としたお題ですが思い付くのは以下のようなところでしょうか。

1.なんだかんだで意思疎通には困らない
 よほどの田舎や山奥に行くとは分かりませんが、ローカル食の強い食堂だったり高速道路のサービスエリア等であれば、英語が通じるので意思疎通が図れます。タクシーに乗る際も、英語が通じるので行き先が伝わらないということはまずないかと。勿論、異様に聞き取りにくくて何を言っているか分からないということはありませんが、日本人の英語も必ずしも相手に伝わっているか分からない訳で(そういう日本人が多いんじゃないかという邪推に基づいてですが)、でも共通言語で意思疎通が図れてるといのは重要なんじゃないでしょうか。おかげでマレー語を全く使うことがなく少し覚えた単語ですら忘れかけてます。。

2.多様な文化、民族
 マレーシア人だけでマレー系、中華系、インド系の3人種がいて、バングラディッシュやパキスタンからの出稼ぎ労働者やアラブ系や欧米系の観光客といろんな人種が入り混じり、いろんな言語が飛び交っているのが日常的なので、多様性が自ずと身に付くんではないでしょうか。

3.1年中暖かい(暑い)
 日中は35度近く、夜は日によって27度くらいと1年を通じて暖かい(暑い)ので、そういう気候が好きの人にとってはうってつけではないでしょうか。おかげでオフの時の服装がどどんラフになっていく自分が怖いですが。。



先月の注目イベント (資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/3	輸出(前年比)	9月	20.0%	14.8%	21.6%
11/3	輸入(前年比)	9月	20.0%	15.2%	22.4%
11/3	貿易収支(MYR)	9月	8.45B	8.60B	10.01B
11/9	鉱工業生産(前年比)	9月	6.3%	4.7%	6.8%
11/9	製造業売上(前年比)	9月		10.6%	16.5%
11/9	金融政策会合		3.00%	3.00%	3.00%
11/17	GDP(前年比)	3Q	5.7%	6.2%	5.8%
11/17	経常収支(MYR)	3Q	12.9B	12.5B	9.6B
11/24	CPI(前年比)	10月	4.1%	3.7%	4.3%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR	13300	~	13700
IDR/JPY	0.79	~	0.85
JPY/IDR	118.00	~	124.50

(注)100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 河合 良介

先月の為替相場

11月のドルルピアは、13465~13600のレンジでの推移となり、値幅約150ポイント、13500台前半の狭いレンジ取引となった。

10月下旬、米金利上昇を受けたドル高の中で、今年の最高値をつけた(ルピア安)流れを引き継ぎ、13580近辺でスタートしたドルルピアは、米トランプ大統領が米国連邦準備理事会(FRB)次期議長に元路線の維持を志向するパウエル理事を指名したことを受けた安心感から、海外資金が流入。13500台後半から下落し、3日には一時、月安値となる13465をつけた。

- ・1日発表されたインドネシア10月CPIは、前年同月比+3.58%の上昇とほぼ予想通りの結果に。
- ・6日発表された第3四半期インドネシアGDPは、前年同期比+5.06%と市場予想を下回ったが、3四半期連続で+5%を維持。
- ・また同日発表された10月インドネシア外貨準備高は、10月の海外投資家の資金流出の影響を受け、前月比約30億ドルの減少に転じた。
- ・10日発表された第3四半期経常収支は、43.8億ドルの赤字とほぼ予想通りの結果に。
- ・15日発表された10月貿易収支は、9億ドルの黒字と市場予想を下回ったが、輸出額は、市場予想を上回った。

以上のように、国内各種経済指標は、良くも悪くもない国内経済状況を反映する形となり、相場への影響は限定的。また国外に目を向けても、大きな波乱要因なく、6日以降は、13500台前半の狭いレンジ推移となった。28日取引終了時点で、13510近辺での取引となっている。

16日、インドネシア中銀が開催した定例会合では、米国の金利引き上げ、インドネシア国内の民間消費や銀行貸出の停滞など、国内外のリスクを踏まえ、ターゲットレート(中銀7日ものリバースレポレート)を4.25%に据え置いた。

今月の見通し

今月のドルルピアは、12月12~13日の米FOMCを無難に消化し、安定した推移を予想する。

先月発表された第3四半期GDPと経常収支は、予想通り、大きなサプライズなく、相場への影響は限定的となった。

今月は、インドネシア国内で発表される経済指標も大きなサプライズなく、また、国外では、注目の米FOMCが開催され今年3回目の利上げを予想しているが、こちらも相場への影響は限定的と見ている。

市場では、ムーディーズによる来年2018年のインドネシア格上げの噂もあるが、市場が織り込み始めるのは、来年以降か。

しかしながら、中下旬にかけ、海外投資家のクリスマス休暇前のポジション調整から、やルピア安にふれる展開を想定しておきたい。

今月のつづやき(現地からの声)

『当地のここが好き!』

「Kira Kira」インドネシア語で、「まあ、だいたい」という意味で、この言葉で、インドネシアで起こる色々なことが説明できます。

もともと天然資源が豊かで暖かい国なので、餓死・凍死の心配がなく、なにが起こっても、この「Kira Kira」精神で、小さなことは気にしない文化が、インドネシアにはあります。

赴任当初は、これが本当に気になるのですが、1年を過ぎた頃でしょうか、この「Kira Kira」が心地よくなっていく駐在員は多いのではないのでしょうか。

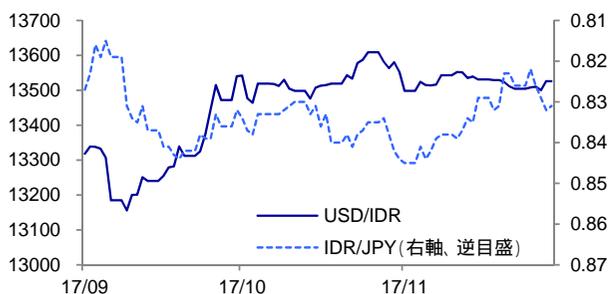
そして、帰任(もしくは横滑り)でインドネシアを離任する時、この「Kira Kira」文化ともお別れだと寂しい想いをするので。

現在、シンガポールから出張でジャカルタ入りしていますが、この雰囲気味わうと、戻ってきたなー、と懐かしく思います。

ただ、お客さまとのアポイントで急いでいる時に、ドライバーさんが30分遅れで到着し、「tidak apa apa ?(私、気にしないで良い?)」と笑顔で言ってきた時は、さすがに怒りました。

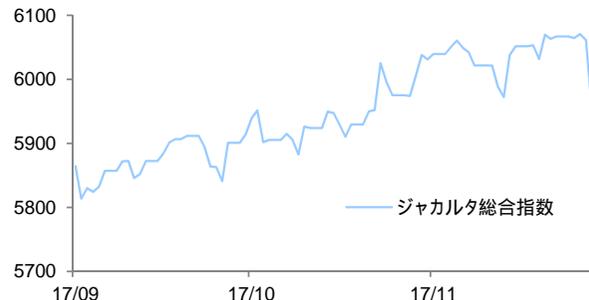
為替の動き

(資料)ブルームバーグ



株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	CPI(前年同月比)	10月	3.68%	3.58%	3.72%
11/6	GDP(前年同期比)	3Q	5.19%	5.06%	5.01%
11/6	外貨準備高(USD B)	10月	-	126.6	129.4
11/10	経常収支(USD B)	3Q	-4.50	-4.38	-4.83
11/15	輸出(前年比)	10月	15.42%	18.39%	15.60%
11/15	貿易収支(USD M)	10月	1,605	895	1,779
11/16	BI 7daysリバースレポ金利		4.25%	4.25%	4.25%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 49.80 ~ 51.20
 PHP/JPY 2.22 ~ 2.24

マニラ支店 樋上 陽一

先月の為替相場

11月のドルペソ為替相場(オンショア・インターバンク市場)は、1ドル=51.58ペソで取引開始。前月27日に直近高値を更新(1米ドル=51.85ペソ)し、節目の1ドル=52ペソ台が射程圏に入ったと思われるが、FRB(連邦準備制度理事会)の次期議長に基本スタンスがハト派のパウエル氏が就任することが濃厚になり、米金利の低下とともにペソの買い戻しが進んだ。また、季節柄、OFW(海外在留フィリピン人労働者)送金によるドル売りペソ買い圧力も意識されていた。

フィリピン統計局(PSA)より発表された比10月消費者物価(CPI)は前年同月比で3.5%増となり、前月の3.4%増(改定値)を0.1ポイント上回り、4か月連続で上昇。インフレ進行を見込む市場参加者が増え、鎮静化していたペソ金利の利上げ観測が台頭し、ペソの買戻し材料となった。

韓国訪問中のトランプ米大統領が、対北朝鮮への軍事オプションを示唆したことなど、リスクオフ地合に傾いたことでドル買ニーズが高まる場面もあったが、ペソの金利上昇観測や比7~9月期GDP(16日発表)に期待したペソ買いが優勢となり、15日には一時1ドル=51.04ペソで取引される場面も。

注目の7~9月期GDPは6.9%(市場予想6.6%)となり、4~6月期GDPが6.5%から6.7%へ上方改訂されるとペソは1ドル=51ペソを割り込んで一段高に。

その後、グローバルにドル売りが進む中、ペソの買い戻しが進み28日には一時1ドル=50.315ペソを記録、3ヵ月半ぶりのペソ高水準で取引されている。(11月28日現在)

今月の見通し

比のインフレは上昇傾向。フィリピン中央銀行は9日、金融政策委員会にて政策金利の据え置きを決めた。据え置きは14年9月以来、25会合連続で、16年6月に新システム「政策金利コリドー(IRC)方式」を導入してからは、12会合連続。中銀は今後の物価について、燃料価格が上昇傾向にあるものの、2019年までは物価は安定的に推移し、インフレターゲットである2~4%に収まるとの見解を示したが、市場では利上げが近いと見ている参加者も増えてきたと思われる。

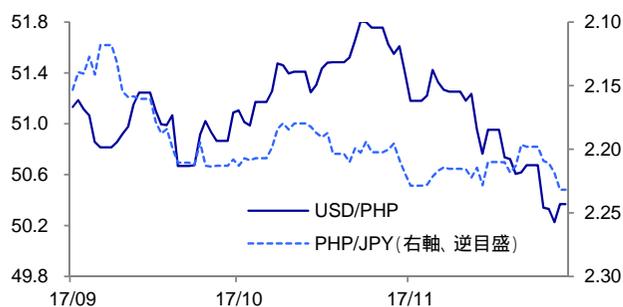
経済のファンダメンタルズをサポートする材料として、左記の通り、比7~9月期GDPは市場予想を上回った。半導体関連を中心に輸出が押し上げた形だが、GDPの7割を占める個人消費の伸び率鈍化を指摘する声は多い。一方で16年の個人消費は選挙でバイアスが掛っており、今はその調整時期との見方も出来よう。

ペソ買材料が目立った先月の流れを引き継ぎ、年初(さらに言えば16年半ば)より続くドル買いペソ売り相場の調整が続く可能性はあるが、9月のOFW(海外在留フィリピン人労働者)送金は前年同月比マイナスを記録、これまでの伸率に陰りが見える。また、財政赤字、国際収支の赤字転落と収支面ではペソ売り材料が揃う。

今月はドルの下値を探りながらもドルペソは底高い展開を予想。ペソ売り材料に再び注目が集まれば、1ドル=51ペソ台回復もありそうだ。(11月28日現在)

為替の動き

(資料)ブルームバーグ



株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



先月の注目イベント

発表日 イベント
 上記ご参照

(資料)ブルームバーグ
 期間 予想 結果 前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 63.70 ~ 65.40
INR/JPY 1.69 ~ 1.75

アジア・オセアニア資金部 ムンバイ室 田川 順也

先月の為替相場

【11月の米ドル/インドルピーは上に往って来いの展開】

64.69レベルで11月の取引をスタート。序盤こそ64.50を割り込む場面もあったが、二週目以降はインド株式市場が調整の色を強める展開にドル/ルピーは上昇する展開。この間米税制改革に対する期待の剥落に伴い、為替市場では全般的にドル安が進行したにも関わらずそれ以上にルピーが売られる展開。14日には65.54を一時的に超え、当月のドル/ルピーの高値つける。ただし、月半ばに米大手格付け会社がインドの格付けをBbb2に格上げを発表すると状況が一転。センセックスが一気に33,500付近まで戻し、ドル/ルピーについても65を割り込む水準まで押される展開。尚、この間予想を上回る印10月消費者物価指数(CPI)、事前予想比大幅に赤字が拡大していた印10月貿易収支の発表があったが、為替市場への影響は限定的だった。終盤にかけてはイエレンFRB議長がハト派な発言を行ったことに加え、公表されたFOMC議事要旨で中期的なインフレ低迷リスクが指摘されていたことが確認されるとドルが売られる展開にドル/ルピーも上値重い展開。28日執筆時点において64.52レベルでの取引となっている。

【11月のインドルピー/日本円は下落する展開】

11月のルピー/円は1.755レベルでオープン。序盤は日経平均が上昇する展開にドル/円が114円米ドルを上抜けて急伸するとルピー/円も当月の高値となる1.775超を示現。ただし、円安は続かず、ドル/円が113.50を挟んだ揉みあいとなる中、上述の通りルピーは対ドルで下落していく展開にルピー/円は緩やかなルピー安・円高で推移。月半ばにかけて1.73を割り込む。後半にかけては、米税制改革の期待が剥落したことや軟調な結果となった米経済指標、上述のFOMC議事要旨の結果を受けてドル/円が下値追ひ。111円割れを目指す展開にルピー/円はおおよそ2か月半ぶりの安値となる1.71レベルをタッチ。その後も安値圏での推移が続き28日執筆時点において1.725レベルでの取引となっている。

今月の見通し

【12月の米ドル/インドルピーは上値の重い展開を予想】

先月の本欄でも言及したが、またしてもドル/ルピーは65後半では重くなる展開だった。10月のインド準備銀行(中央銀行、RBI)の金融政策決定会合では+4%という物価水準にコミットする旨、再度強調がされた。かかる中、これも原油相場が2015年半ば以来となる水準まで大きく上伸している。1バレルあたり10ドルの上昇はインドのCPIを+0.3-0.35%押し上げるとも言われている中で、物価上昇のプレッシャーが強くなっている。加えて、先月発表された印CPIの内訳を確認すると食料品価格についても堅調な結果となっている。ヘッドラインCPIは前年比+3.58%上昇となっているが、中央銀行が政策金利の判断の拠り所としている+4%も手の届く範囲となってきている。物価に対して為替市場こそビビットな反応を見せなかったものの、金利市場ではインド10年国債利回りが昨年9月以来となる7%を明確に上抜ける動きとなっている。今すぐに政策金利の引き上げが行われるという状況ではないが、少なくとも利下げのコンセンサスについては消失しつつあり、ルピーの下支え材料となろう。併せて、他アジア新興国と比較しても10年7%は海外投資家にとって魅力的な水準であり、インドへの投資資金の流入を通してルピー買いフローを引き起こすだろう。

一方米国に目を向けると、年末までのドル高材料は出尽くし感がある。12月はFOMCが開催され、0.25%の利上げが発表されるだろう。ただし、これも利上げについては既に市場に十分に織り込みが済んでおり、来年3月利上げについて具体的な示唆があれば別だが、12月の利上げを持ってドル高になるというのは幾分言い過ぎだろう。また、税制改革案については上院での可決が予断を許さない状況。加えて可決されたとしても上院案と下院案には隔たりがあり、これを一本化する必要があることを勘案すれば12月中に決着することは困難であると考えていた方がよいだろう。

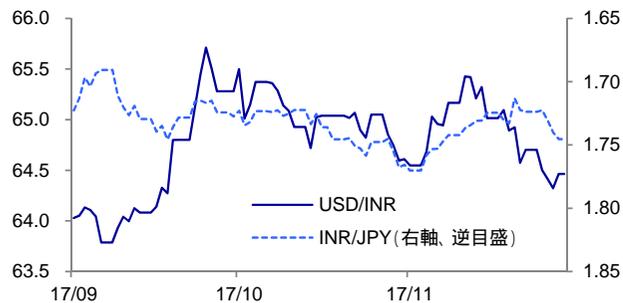
総じて12月の米ドル/インドルピーは上値の重い展開を想定している。

今月のつづやき(現地からの声)

『当地のここが好き！』
インドのここが大好き！！
と輝く笑顔と共にためらいなく叫ぶには、当地に長いすぎたような気がする。
インドに対する好悪の情は両極端であると聞く。大好きになるか、大嫌いになるか。
長くいるんだからインドが好きなんだろう、と聞かれることもあるが、確かに紀元前から続く歴史や文化、繊細でありながら堂々たる遺跡に対する賞賛の念は尽きることがない。
インド料理だって、時々お腹を壊したりもするけれど、店によって人によって違うスパイスのハーモニーを無性に味わいたくなって突進する。大好きだ。
しかし、生活の中でコミュニケーションは、慣れない人にとってはストレスの一言に尽きる。
嘔然とするような理屈を平然と主張し、自分をやり込めようとする相手との戦いは時間と労力の無駄に思えるし、怒りのゲージが日本にいた時には考えられないくらい振り切れる。
わたし、こんなに怒りまくる人だったっけ、と我に返って自己嫌悪に陥ることもしばしばである。
しかし当地チェンナイを去る時、多くの日本人はこみ上げる感情に涙をあふれさせる。それまで文句を言い倒し、怒りまくった人であればある程、いわゆる「チェンナイロス」に陥る。
インドとの関わりは、あると思わなかった自分自身をもってあたらなければならず、それは協力和善意で作られた関係よりも強く自分とインドを結び付けるからだと思う。
インドのどこが好きなのかを特定することはできないが、美しくアピールする歴史や文化、遺跡よりもなお、当地で持った関わりや感情を通して、感謝と共にこの地そのものを愛しく思う。(チェンナイ支店 近藤)

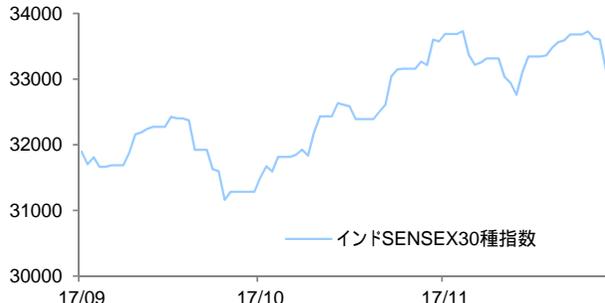
為替の動き

(資料) ブルームバーグ



株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

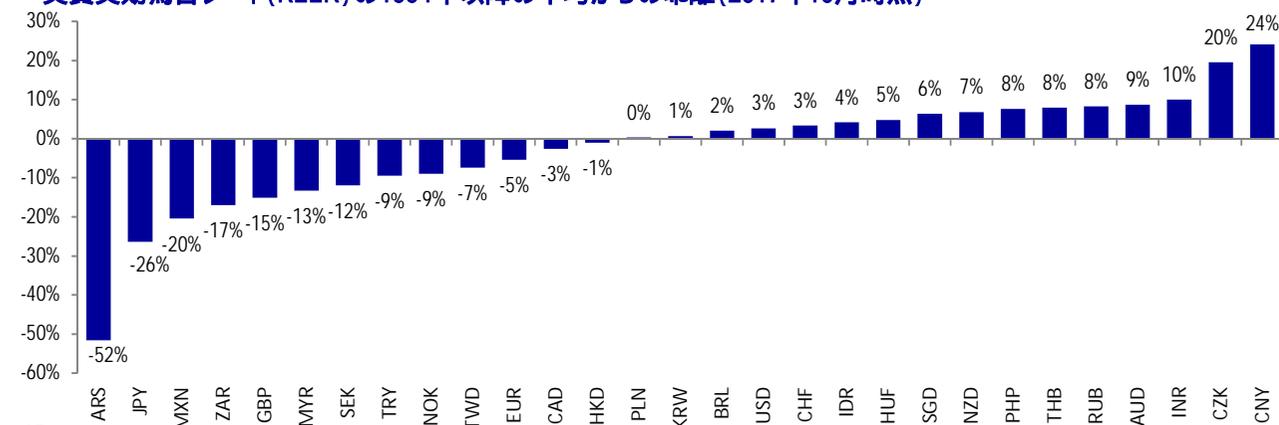
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	製造業PMI	10月	-	50.3	51.2
11/3	サービス業PMI	10月	-	51.7	50.7
11/10	鉱工業生産(前年比)	9月	4.1%	3.8%	4.5%
11/13	消費者物価指数(前年比)	10月	3.43%	3.58%	3.28%
11/14	貿易収支	10月	-10.5Bio	-14.0Bio	-8.9Bio

為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2016年末	2017年11月末	騰落率	株式市場	2016年末	2017年9月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	19762.6	24272.35	22.8%	-
日本	USD/JPY	116.96	112.54	-3.8%	日経平均株価	19114.37	22724.96	18.9%	23.6%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0517	1.1904	13.2%	ドイツDAX指数	11481.06	13023.98	13.4%	13.4%
英国	GBP/USD	1.234	1.3525	9.6%	ロンドンFTSE100指数	7142.83	7326.67	2.6%	-6.4%
豪州	AUD/USD	0.7208	0.7566	5.0%	S&P/ASX200指数	5665.8	5969.892	5.4%	0.4%
カナダ	USD/CAD	1.3441	1.2897	-4.0%	S&Pトロント総合指数	15287.59	16067.48	5.1%	9.5%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.945	6.6091	-4.8%	上海総合	3103.637	3317.188	6.9%	12.3%
香港	USD/HKD	7.7559	7.8099	0.7%	香港ハンセン	22000.56	29177.35	32.6%	31.7%
インド	USD/INR	67.9238	64.4637	-5.1%	インドSENSEX30種	26626.46	33149.35	24.5%	31.2%
インドネシア	USD/IDR	13473	13526	0.4%	ジャカルタ総合	5296.711	5952.138	12.4%	11.9%
韓国	USD/KRW	1205.83	1087.97	-9.8%	韓国総合株価	2026.46	2476.37	22.2%	35.4%
マレーシア	USD/MYR	4.4862	4.091	-8.8%	ブルサマレーシアKLCI	1641.73	1717.86	4.6%	14.7%
フィリピン	USD/PHP	49.6	50.368	1.5%	フィリピン総合	6840.64	8254.03	20.7%	18.8%
シンガポール	USD/SGD	1.4468	1.3477	-6.8%	シンガポールST	2880.76	3433.54	19.2%	28.0%
台湾	USD/TWD	32.326	30.01	-7.2%	台湾加権	9253.5	10560.44	14.1%	22.9%
タイ	USD/THB	35.835	32.644	-8.9%	タイSET	1542.94	1697.39	10.0%	20.8%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2017年10月時点)



(資料)BIS

実質GDP成長率

	2016Q1	2016Q2	2016Q3	2016Q4	2017Q1	2017Q2	2017Q3	2015	2016
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	0.6	2.2	2.8	1.8	1.2	3.1	3.3	2.9	1.5
日本*	2.1	2.0	0.9	1.6	1.0	2.6	1.4	1.1	1.0
ユーロ圏	1.7	1.8	1.7	1.9	2.0	2.3	2.5	2.1	1.8
英国	1.9	1.8	1.8	1.6	1.8	1.5	1.5	2.3	1.8
豪州	2.6	3.2	1.9	2.4	1.8	1.8		2.4	2.5
カナダ*	2.8	-1.4	4.2	2.7	3.7	4.5		1.0	1.5
エマージングアジア									
中国	6.7	6.7	6.7	6.8	6.9	6.9	6.8	6.9	6.7
香港	1.0	1.8	2.0	3.2	4.3	3.9	3.6	2.4	2.0
インド	9.1	7.9	7.5	7.0	6.1	5.7	6.3	8.0	7.1
インドネシア	4.9	5.2	5.0	4.9	5.0	5.0	5.1	4.9	5.0
韓国	2.9	3.4	2.6	2.4	2.9	2.7	3.8	2.8	2.8
マレーシア	4.1	4.0	4.3	4.5	5.6	5.8	6.2	5.0	4.2
フィリピン	6.9	7.1	7.1	6.6	6.4	6.7	6.9	6.1	6.9
シンガポール	1.9	1.9	1.2	2.9	2.5	2.9	5.2	2.0	2.0
台湾	-0.3	1.0	2.0	2.8	2.6	2.3	3.1	0.8	1.4
タイ	3.1	3.6	3.2	3.0	3.3	3.8	4.3	2.9	3.2

(注)インドの年間成長率は会計年度(4~3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

消費者物価上昇率

	17/05	17/06	17/07	17/08	17/09	17/10	17/11	2015	2016
	(前年比%)							(前年比%)	
先進国									
米国	1.9	1.6	1.7	1.9	2.2	2.0		0.1	1.3
日本	0.4	0.4	0.4	0.7	0.7	0.2		0.8	-0.1
ユーロ圏	1.4	1.3	1.3	1.5	1.5	1.4	1.5	0.0	0.2
英国	2.9	2.6	2.6	2.9	3.0	3.0		0.0	0.7
豪州		1.9			1.8			1.5	1.3
カナダ	1.3	1.0	1.2	1.4	1.6	1.4		1.1	1.4
エマージングアジア									
中国	1.5	1.5	1.4	1.8	1.6	1.9		1.4	2.0
香港	2.0	1.9	2.0	1.9	1.4	1.5		3.0	2.4
インド	2.2	1.5	2.4	3.3	3.3	3.6		4.9	5.0
インドネシア	4.3	4.4	3.9	3.8	3.7	3.6		6.4	3.5
韓国	2.0	1.9	2.2	2.6	2.1	1.8	1.3	0.7	1.3
マレーシア	3.9	3.6	3.2	3.7	4.3	3.7		2.1	2.1
フィリピン	3.1	2.7	2.8	3.1	3.4	3.5		1.4	1.8
シンガポール	1.4	0.5	0.6	0.4	0.4	0.4		-0.5	-0.5
台湾	0.6	1.0	0.8	1.0	0.5	-0.3		-0.3	1.4
タイ	0.0	-0.1	0.2	0.3	0.9	0.9		-0.9	0.2

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

失業率

	17/04	17/05	17/06	17/07	17/08	17/09	17/10	2015	2016
	(%)							(%)	
先進国									
米国	4.4	4.3	4.3	4.4	4.3	4.4	4.2	5.3	4.9
日本	2.8	3.1	3.1	2.8	2.8	2.8	2.8	3.4	3.1
ユーロ圏	9.2	9.2	9.2	9.0	9.0	9.0	8.9	10.9	10.0
英国	4.6	4.5	4.4	4.3	4.3		0.0	5.4	4.9
豪州	5.7	5.5	5.5	5.6	5.6	5.6	5.5	6.1	5.7
カナダ	6.5	6.6	6.6	6.5	6.3	6.2	6.2	6.9	7.0
エマージングアジア									
中国			4.0					4.1	4.0
香港	3.2	3.2	3.2	3.1	3.1	3.1	3.1	3.3	3.4
インドネシア					5.5			6.0	5.6
韓国	4.0	3.6	3.6	3.8	3.6	3.8	3.7	3.6	3.7
マレーシア	3.4	3.4	3.4	3.5	3.4	3.4		3.2	3.5
フィリピン	5.7			5.6				6.3	5.5
シンガポール			2.2			2.1		1.9	2.1
台湾	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.7	3.8	3.9
タイ	1.3	1.3	1.1	1.2	1.1	1.2	1.3	0.9	1.0

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

経常収支

	2016Q1	2016Q2	2016Q3	2016Q4	2017Q1	2017Q2	2017Q3	2015	2016
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.4	-2.4	-2.4	-2.4	-2.3	-2.4		-2.4	-2.4
日本	3.4	3.5	3.6	3.8	3.8	3.8	4.0	3.1	3.8
ユーロ圏	3.3	3.5	3.4	3.3	3.3	3.0		3.2	3.3
英国	-5.5	-5.9	-6.5	-5.9	-5.4	-5.1		-5.2	-5.9
豪州	-3.6	-3.7	-2.6	-0.8	-1.1	-2.1		-4.7	-2.7
カナダ	-3.5	-3.6	-3.6	-3.2	-2.9	-2.8		-3.4	-3.3
エマージングアジア									
中国	2.5	2.4	2.4	1.8	1.5	1.3	1.0	2.8	1.8
香港	3.9	4.5	4.3	4.6	4.6	4.6		3.3	4.6
インド	-1.1	-0.8	-0.5	-0.6	-0.7	-1.2		-1.1	-0.6
インドネシア	-2.1	-2.2	-2.2	-1.8	-1.5	-1.4	-1.3	-2.1	-1.8
韓国	7.9	7.9	7.2	7.0	6.4	5.7	5.9	7.7	7.0
マレーシア	2.4	1.9	1.9	2.1	2.0	2.6	3.0	2.9	2.1
フィリピン	2.1	1.1	1.0	0.2	-0.1	-0.2		2.5	0.2
シンガポール	17.2	18.8	19.5	19.0	19.9	19.3	18.8	18.1	19.0
台湾	14.0	14.3	13.6	13.4	12.8	12.6	13.2	14.4	13.5
タイ	9.9	11.0	12.2	11.9	11.2	10.6	10.8	8.1	11.9

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4~3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	(単位:bp)	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	1.00 - 1.25	引き締め: 2015/12/17	0.25 - 0.50	2017/6/14	+25	2017/11/2	現状維持
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10	2017/10/31	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5	2017/10/26	現状維持
英国	バンク・レート	0.50	引き締め: 2017/11/2	0.25	2017/11/2	+25	2017/11/2	+25bp
豪州	キャッシュ・レート	1.50	緩和: 2011/11/1	4.75	2015/8/2	-25	2017/11/7	現状維持
カナダ	翌日物金利	1.00	引き締め: 2017/7/12	0.50	2017/9/6	+25	2017/10/25	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利	4.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2015/8/25	-25	2015/10/23	-25bp
インド	翌日物レポ金利	6.00	緩和: 2015/1/15	8.00	2017/8/2	-25	2017/10/4	現状維持
インドネシア	7日物リバースレポレート	4.25	緩和: 2015/2/17	7.75	2017/9/22	-25	2017/11/16	現状維持
韓国	7日物レポ金利	1.50	引き締め: 2017/11/30	1.25	2017/11/30	+25	2017/11/30	+25bp
マレーシア	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/7/13	3.00	2016/7/13	-25	2017/11/9	現状維持
フィリピン	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/5/16	3.00	2016/5/16	-100	2017/11/9	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	1.50	緩和: 2011/11/30	3.50	2015/3/11	-25	2017/11/8	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	6.25	緩和: 2012/3/12	15.00	2017/7/7	-25	2017/7/7	-25bp

(注)インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBIレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行